あいはぐ

おじぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あいはぐ

【Ｎコード】
Ｎ６３３９Ｅ

【作者名】
おじぃ

【あらすじ】
物語のテーマは、『絆』。腰越絵乃は、山奥の村に暮らす一見クールで、実はちょっと天然な小学生。そんな絵乃たちが、友情を深めたり、時に大人の事情に巻き込まれたりして成長してゆく、日常を描いたコメディー。

※ただいま改訂中のため更新停止中です。

1，さくらさかなくてもいちねんせい（前書き）

前作『いちにちひとつぶ』に出張させたあの人をメインにした、幼い少女が大人の階段をのぼってゆく物語です。

1，さくらさかなくてもいちねんせい

今日の私が在るのは、この村があったから。
死にたいと思った日も数知れずあったから。
まがい物の私を、愛してくれた人が居たから。
そのすべてが、私を優しく包み、育み、やがて愛を育んで、抱きしめることを知らぬ間に教えてくれた。

◇◇◇

四方を山に囲まれた小さな村、山興村（やまおこしむら）。春には透き通る雪解け水が小川、水路を流れる。水路から溢れた水は舗装されていない小道に新たな小川をつくる。そして道の端には無数のタンポポが咲き乱れ、フラワーロードが出来上がる。

夏、昼間には時間により様々なセミが鳴き、田んぼにはイナゴが飛び交い、鳥類やオニヤンマがグライダーの様に飛び交いそれを捕食する。夜はホタルが光り、コオロギやキリギリスが合唱する。

秋には稲穂がさらさらと心地良い音を奏で、真っ赤な蜻蛉（とんぼ）たちが空いっぱいに飛び交う。夜長はマツムシやスズムシが郷愁を感じさせる。

そして冬は車が埋まる程のこんこんとした雪景色。この村は豪雪地なのだ。冬は家族で雪掻きしたり火燵に入ってテレビを見ながら隙間風が入る茶の間で、文字通りお茶を飲みながらミカンや駄菓子を

食べる。

そんな平和で長閑（のどか）な村に少女、腰越絵乃（こしごえ えの）は暮らしていた。

◇◇◇

１９９７年４月、まだ残雪が多く、桜も咲いていない春、絵乃は村の小さな小学校へ入学した。

全校生徒は絵乃を含めてたったの六人。山興小学校は木造平屋、約１５０坪の古い校舎で、校庭の面積は陸上競技の約４００平方メーター。校庭の隅にはニワトリやウサギを飼っている飼育小屋があり、動物たちも生徒には含まれないがこの学校で共に暮らす仲間となっている。

周囲を木々に囲まれた森の中の学校はどこか閉鎖的ではあるものの、子供たちは自然に囲まれながら教養も心もすくすくと育つ。

この年の新入生は絵乃一人のみ。

入学式は質素なもので、視聴覚室など空いている部屋で絵乃とその両親が校長をはじめ教職員と挨拶をしたり、必要書類を提出する程度だ。

この学校には体育館や講堂はない。なので雨の日は体育の授業は中止になり、教室で椅子取りゲームなど、適当な遊びをするのだ。

ちっぽけな式が終わると、早速の帰宅となる。

「絵乃、今日からキミの新しい人生がスタートだっ！」

絵乃の母が言う。

「新しい人生？　私、生まれ変わったの？」

ずっと前から何変わらぬ日常。

しかし、絵乃にとって小学校に入学したという変化は、自身の世界を一新させた。

脱皮したような、何年かぶりに初日の出を見て、今年は良い年になりそうなどと何となく思ってしまうような感覚。

今度は父がフッ、と小さく笑って答える。

「そうだね、生まれ変わったかもね」

何故笑われたのか、真面目に問う絵乃には解らなかった。

こうして山奥の小さな小学校から絵乃の『学生ライフ』がスタートした。

◇◇◇

翌朝、絵乃は四年生の浦佐洋子（うらさようこ）と一緒に登校する事になった。洋子の通学路の途中に腰越家があり、立ち寄ってもらう事になった。

つくしがあちこちにょきにょき立っている舗装されていない黄土（おうど）色（いろ）の土の道は、動物の糞が見事にカムフラージュしそうな色合いだ。路側帯の代わりに緑の草たちが、文字通りグリーンベルトとなって

いって、車一台やっと通れる程の狭い道だが中央線だってある。それも草たちが織り成すものだ。車のタイヤに踏まれない所には草が生えるのだ。

草の上を軽く掠(かす)めるように蹴ってみると、さわっ、さわっ、と軽い音をたててすぐ消える。

ところが風が吹けば、ふさーっ、と辺りの草たちが一斉に靡(なび)く。秋になれば草たちは脇役。道を囲む田んぼの稲穂たちが、ざわーっ、さらさら〜と、メインコーラスを奏で、より一層広大な大地を感じられる。絵乃たちにとって、それは当たり前の日常。

そして、草を蹴り上げようとした時、足元にヘビが居て、牙を剥かれる事もたまにある。

「絵乃ちゃん、そろそろ桜が咲くね」

「うん、桜咲く前に一年生になっちゃった」

洋子が絵乃に言ったように、かつて洋子が一年生だった頃にも、周囲の人々からそんな事を言われたのは寒冷地ならではだ。

「桜はね、春のたった数週間だけ不思議な世界をみんなに見せるために、一年かけてピンク色の花を咲かせるエキスを木の中に貯めるんだよ。私の花で、みんなが素敵な一年を過ごせるように、って願いを込めてね！」

「へぇ、みんなのために一年頑張るんだね」

「そう、だから私も絵乃ちゃんも、桜さんに負けないように頑張ろ

うね！」

「うん！　桜咲くの楽しみになってきた」

これから絵乃たちには、頑張り過ぎなければならないほどの試練が待ち受けている事を本人たちは知る由もなく、今はまだ一部の者しか知らなかった。

1，さくらさかなくてもいちねんせい（後書き）

昨年秋頃からちょくちょく執筆していた物語です。とはいえ第一回目のこの話は出来たてのものです。

色んなネタを用意していますので、これから絵乃の成長を見守ってやって下さいませ。

2，ひみつきちを作ろう

二年生の七月、あまり社交的とは言えない絵乃でもすっかり学校に馴染んで他の生徒五人と友達になり、新一年生も辛うじて一人だけ入学した。いや、小さな村だから一年生の湯沢大介（ゆざわだいすけ）も含めて入学前からみんなと友達だった。

だから社交性だとか、そんな心配は要らない。

この村の風土がいつの間にかみんなを仲間にしてしまうのだ。

授業は一学年に一人しか生徒が居ないので、全学年で同じ教室を使い、先生は教壇に立つのではなくそれぞれの生徒の机を回るマンツーマン形式で、一人の教師が六人に学問を教える。なので教師は全学年を一括して担任するのだ。現在の担任は黒井彰（くろいあきら）先生で、今年度一杯で定年退職となり還暦を迎える。

◇◇◇

じゅうぃ～
みーんみーん
ぼーしんつくつく
じゅうわぁぁぁ

教室には外のあちらこちらで約七日間の生命を必死に生きる蝉たちの声。アブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、クマゼミ、少々暑苦しい合唱だ。

絵乃は上から、おかっぱに近い短髪、性格と反した黄色い柄なしTシャツ、赤い半ズボンジャージという服装で自分の席に座り、勉強しているフリをして昼休みの計画を立てていた。

この村は山に囲まれ、学校は森に囲まれている。そんな環境は秘密基地をつくるには絶好の環境なのだ。

そう、絵乃が考えているのは『じぶんだけのひみつきちけいかく』だ。

この村は周囲の村とは隔絶されているが、近所付き合いには抜かりなく、例えば子供が一人で留守番をする事になれば誰かの家に預けられ、または預かったりする。

この村で、誰かが一人になる事は滅多にないのだ。

そこで絵乃は、遊びに行くついでに立ち寄れる場所に、自分だけのプライベートな空間を作って、秘密の時間を満喫しようと考えた。

みんなと一緒に居るのは嫌いではないが、たまに一人になりたい時もあるのだ。

だが自宅は集落の真ん中にあり開けていて、とても人目に付かない場所などない。

そこで集落の端にある学校の近辺ならすぐそこが森だし、休日には家から自転車で30分走れば行ける都合の良い場所なのだ。だから登校日の一時間ある昼休みを使って少しずつ基地を建設しようと考えたのだ。

◇◇◇

昼休み、絵乃は自分だけの秘密基地を作りたかった。しかしそれには勝たなければならない事があった。

「かくれんぼしたいひとこのゆびとまれ、は～やくしないときれちゃうぞ～」

六年生の渡辺真（わたなべ まこと）が下級生のみんなとかくれんぼをして遊んでくれる。絵乃には真のそれを断るなんて出来ない。しかし、鬼を決めるジャンケンで負けたらみんなを捜さなければならなくなる。

だから、負けられない。

◇◇◇

無事にジャンケンに負ける事なく、かくれんぼをしながら秘密基地を作る予定の場所に着いた絵乃。鬼役は五年生の浦佐洋子（うらさ ようこ）になった。洋子は学校では頼れるお姉ちゃん。少しツンツンしていて素直になれないのが玉にキズ。

秘密の場所に着いた絵乃は、先ず足元に散らばってる木の枝を拾い集めて基地の端っこにまとめた。後は冬の大雪で倒れた木をベンチにしてとりあえず今日の作業は終わり。これだけでも大分時間がかかってしまった。

ふぅ、と額の汗を左腕で拭って倒木ベンチで一休み。

うぃーんうぃーんうぃーんぢりぢりぢりぢり…

ちゅん、ちゅぴちゅぴっ…

ざーざーさわさわ…

絵乃は気持ちを落ち着かせて目を閉じた。

すると静かな森に響く蝉や小鳥たちの声と木々の掠れる音が頭の中を優しく洗うように、深呼吸すれば身体全体に新鮮で澄んだ空気が浸透してゆくように爽やかな気分になる。

なんて、心地良いのだろう。

重たい木の移動作業で溜まった疲労感が、二の腕辺りからまるで魂ごと抜けるように一気に軽くなってゆく。

絵乃は、私も森の中で暮らす生き物たちと同じ場所に生きてるんだなぁ、と実感した。同時に、いつか森のみんなとお友達になりたいと願った。

きーんこーんかーんこーん♪♪

学校の予鈴が鳴る。今日のかくれんぼもみんなに見付からなずに終わった。絵乃は少し速足で校庭に戻った。

「絵乃ちゃん何処に隠れてたのぉ？　いっつも絵乃ちゃんだけは見つかんないよね」

洋子が言うと絵乃は、秘密の場所があるんだよと答え、その場所を教えて欲しいとみんなにせがまれたがそれでは意味がない。

みんな、ごめんなさい。

絵乃は心の中で謝った。

こうして絵乃は小さな村に自分だけの秘密基地を作ったのだった。

2，ひみつきちを作ろう（後書き）

まだお話が燻っている『あいはぐ』です。ただ第一回目からさりげない『仕掛け』はあります。お話の舞台は前作の『いちにちひとつぶ』と違って実在する場所ではないので舞台設定は今後の話に都合の良いように作っています。

ちなみに『いちにちひとつぶ』の舞台は神奈川県の湘南にある茅ヶ崎という所です。

3，大せつないのち

八月、地球は滅亡する。

そんなニュアンスで世間を騒がしたノストラダムスの予言。この日は正に予言された当日。

予言は山奥にある山興村もメディアを通して伝わっていて、ちょっとした騒ぎになるのは都会と変わらない。しかし何故だろう？この地球が滅亡するというのに、不思議と恐怖感はなかった。そんな大それた事などある筈ない、いま自分が暮らしているこの空間が自分と共に消え行くなんて、子供たちにとっては壮大過ぎて、大人たちには馬鹿らしいのだろう。

学校は夏休み。人生最後の思い出作り（かもしれない）として、五年生の洋子、二年生の絵乃、一年生の大介で近くの河原で大人には内緒のピクニックをしていた。他の子供たちは家族旅行で村を出ている。

近所付き合いが緊密なこの村で大人たちに黙ってそんな事を実行出来たかと言うと、公民館を兼ねた村役場で緊急集会が行われており、村を離れていない大人たちは例外なく役場に集まっているのだ。なので村の民家に残っているのは旅行に出掛けていない三人の子供だけ。人口が少ないとはいえ、役場を除けば子供が三人しか居ない村というのは奇妙なものだ。

この日、大人たちは村で唯一県や国など外部の自治体と頻繁に連絡を取っている村長から、やはり俄かに信じ難い、けれど偽りのない事実を聞かされる。緊急集会が行われるのはこのためだ。

まさか、滅亡だなんて…。

◇◇◇

子供たちは河原を下流に向かって歩いていた。周囲を木々に囲まれた河原には人の頭ほどの楕円形の大きな石がごろごろしていてサンダルを履いている三人は足元に注意していても踏み締めた石がグラグラして時々躓(つまづ)きそうになる。

河原に着くと、遊び道具として三人で持ち寄った5リットルのバケツや川の生き物を捕まえるための目が粗い柄が細い竹で出来た小さな網、気圧変化で袋が少々膨らんだポテトチップスなどの食料を取り敢えずごろごろした丸い石たちの上にバランス良く置く。川の流れは上流なので速く、幅は二車線の道路くらいだ。流されれば大人だって助からない。

大介は裸足になり海水パンツに着替えて川の中の足場を探し、流れが緩やかな所を選びながら突き出ている岩まで泳いだ。その岩には水生生物がよく潜んでいるのだ。

洋子と絵乃は唯一の食料であるポテトチップス（うす塩味）を手と口を休めずに貪り食いながら、流れの速い川に入ってさぞお腹を空かすであろう大介が岩にくっついた生物を探る様子を傍観したり晴れ渡る空を見上げ、大きなアブを追い掛ける一頭のオニヤンマを観察していた。

ポテチの袋の中を探って中身が無くなった事を確認した絵乃はふと思った。

「ねぇ洋子ちゃん、大介君の分のポテチ、残しておかなくていいの

？」

「ん？　あっ…」

夢中でポテチを貪り食った二人は、大介の分を残しておく事などすっかり忘れていた。

「へ、平気よ、大介はね、ああやって岩を探ったりして食料を捕ってるんだから」

ちなみにその岩に潜んでいる生物といえばヤゴなどの水生昆虫くらいで、とても日本人が食べるようなものではない。

釣り竿があればアユやマスが釣れたりするが、生憎そんな物は持っていない。

「お～い、でっかいヤゴとかアユのちっちゃい奴とかよくわかんない魚採れたぞ。あ～腹減った」

バケツにコオニヤンマのヤゴを一頭とメダカほどの小魚を数十匹泳がせて大介が戻ってきた。

洋子と絵乃によって食料が食べ尽くされた事など知らない大介は大漁に満足してご機嫌だ♪♪

「そう、じゃあその小魚でも塩焼きにしたら？」

洋子は空腹の大介にそんな無茶な提案をした。

「うん！　そうしよう！　って出来る訳ねぇべ？　こんなちっちぇえの」

メダカほどの小さな魚を塩焼きにすれば可食部など残らず消し炭になってしまう事など言うまでもない。

「食べないって言うならしょうがないね。大介はお昼ご飯抜きだ♪♪」

「いやいやポテチあるべした？」

大介は洋子がお昼ご飯抜きなんていう冗談を言っていると思っていた。

「ごめんなさい大介君、洋子ちゃんと二人で食べてたらいつの間にか無くなっちゃったの」

絵乃の申し訳なさそうな表情と言葉に大介は本当にお昼ご飯抜きなのだと悟った。

「スッキリ晴れた真っ青な空、透き通るきれいな川っ！　この絶景だけでお腹いっぱいじゃない？」

スッキリ晴れた真っ青な空から時々オニヤンマが食べ残したアブやハチの残骸が落ちてきて、洋子にそう言われて空を見上げた大介の口の中にそれが見事に入った。

「ぐふぇっ！！　っぺっ！！　じゅほっ！？」

「トンボさんが大介君に食べ物分けてくれたのかなぁ？」

絵乃は素で言う。大介はオニヤンマが食べ残した虫を吐き出す。

「ぶふぁっ、まだ生きてた。あの虫。俺の口の中でうねうねした。あ～、俺の頭がアンパンで出来てたらなぁ…」

虫が口の中に入る事はたまにある。村の人々の殆どはそんな事があっても、すぐ別の話題に切り替える余裕があるのだ。

自分の頭がアンパンで出来ていない事を悔やむ大介。しかしこの村にはジャ〇おじさんどころかパン職人すらいない。したがって『自分の頭を食べる＝死』となる。

「まぁいいや。家に帰ればじいちゃんが釣ってきた鮎が余ってるし、解凍して塩焼きにしよう」

「ごめんね大介、今度アイスキャンディー買ってあげるから」

「ホントに洋子ちゃん？　約束だよ？」

「じゃあ私は…」

「絵乃ちゃんはまだ二年生だからいいよ。ここは五年生の私に任せなさいっ！」

こうしてポテチ問題は解決したようだ。

「うわっ！」

バケツを覗き込む大介が驚いた。

「どうした？」

洋子が駆け寄り、絵乃もそれに続く。

「お魚さんが…」

絵乃はその光景ショックを受けた。

バケツの中で、大介が捕まえたコオニヤンマのヤゴが小魚を捕食しているのだ。尻尾をくわえられた小魚は血を吹き出しながら必死に逃れようとしている。しかしヤゴの顎は強く、一度捕らえた物はヤゴ自らが放さない限り逃げられない。

「すげぇ…」

大介はそれを唖然と観察している。

「お魚さん、可哀相」

絵乃は半泣きで見ていた。

「よく見ておくんだよ。私たちがいつも食べてる塩焼きとかお刺身だって、最初は生きてるのをさばくんだよ。私たちだって、お魚さんから大切な命を貰って、今こうやって元気に生きてるんだよ」

「そうだよね、じいちゃんが釣ってきた魚だって、昨日まで生きてた」

「命、貰ってる」

「そう、それに、さっき絵乃ちゃんと食べたポテチの材料になってるジャガイモだって、畑の土の中で生きてたんだよ」

「うん、ばぁちゃんがよく言ってる。畑の野菜だって生きてるんだよ、って」

村の大半の家の庭には畑があり、村の子供たちは野菜だって生きていると教えられているのだ。

「そう、だからね、『命』って自分だけのものじゃないんだよ。お父さんとお母さんから貰って、食べたり飲んだりしたものには運動するエネルギーを、家族とか友達とかペットには『絆』で心のエネルギーを貰うの。数え切れないくらい多いものに支えられてる、たったひとつの、すごく貴重で、生きてるだけでも奇跡なんだよ。それだけは大きくなっても忘れないでね」

「ヤゴも俺たちも、こうやって支えられて生きてるんだな」

ヤゴに捕食された小魚は、頭部だけ残り口をぱくぱくさせて、バケツの底に転がっていた。命の灯が少しずつ消え行く姿を三人は心のフィルムに焼き付けた。こうして消えた命はヤゴを成長させて、やがてトンボになって翼を広げ大空へ飛び立つことだろう。

その後、大介はヤゴや小魚たちを川へ逃がし、三人は村の集落へ戻りそれぞれの家に帰った。

◇◇◇

私が玄関の扉を開けると、おばあちゃんが出迎えてくれた。

「あら絵乃ちゃん、お帰りなさい。今日は洋子ちゃんと大介君と遊んでべかぁ？」

私は靴を脱ぎながら言う。

「うん、あっ、今日は夕ご飯いらない」

「あら、どうしてだべ？　今日は絵乃ちゃんが大好きなモロヘイヤもあるべよぉ？」

おばあちゃんは不思議そうな顔で私を見る。

「洋子ちゃんがね、みんな色んな命に支えられながら生きてるって言ってた。だからちょっとだけでも犠牲になるが少なくなれば、助かる命は多くなる。だから夕ご飯は食べたくないの」

命に感謝するために私が考えた事だった。

「じゃあな、絵乃ちゃん？　もし絵乃が今夜のモロヘイヤさんを食べなかったら、どうなっちゃう？」

「食べられないで残っちゃう」

考える間でもない結果。

「そしたら、せっかく絵乃ちゃんのために命をくれたモロヘイヤさんは、誰を支える事も出来ねぇで棄てられて燃やされちまう。それってすげぇ可哀相だべぇ？」

「うん、可哀相」

「だべぇ、だからぁ、ちゃんと残さねぇで食べてあげるのが『ありがとう』の言葉の代わりになるんだべしたな？」

言われてみれば、おばあちゃんの言う通りだった。きっと洋子ちゃんもそう思ってると思う。

今日は『命』を深く考えた日だった。

それと、ノストラダムスが予言した、地球滅亡の日でもあった。結局、夜になっても隕石は堕ちてこなかった。地球の無事を確認した私は、二階の子供部屋で眠った。

◇◇◇

日付が変わり地球の無事を確認した深夜、喉が渇いて目が覚め、飲み物を飲みに一階の炊事場にある冷蔵庫へ向かうと、曇りガラスが嵌め込まれた木製の扉を挟んで隣の居間からお父さんとお母さんが内容は聞き取れないけれど、真剣な顔をして話し合っているのが聞こえてきた。

4，絵乃の海岸物語

小学三年生の夏休み。腰越家の三人は神奈川県　葉山(はやま)町の森の中にある別荘に来ていた。別荘はコテージ風で、一階は個室や洗面所など、一般家庭の設備が揃っていて、他に吹き抜けの屋根裏部屋がある。中に居ながら屋根の形がはっきり判る構造だ。

この辺り一帯（西から二宮町、大磯町、平塚市、茅ヶ崎市、藤沢市、鎌倉市、逗子市、葉山町）を『湘南』と呼ぶが、葉山はその中では割と静かな町で、鉄道の駅がない。山興村とは違う自然環境に囲まれた町は、海と山が共存してして洒落ている。

今年は地元のアンティークな家具店でカフェテーブルを購入し、広間の真ん中にある森の中を見渡せる窓辺に配置した。森の景色は心を落ち着かせてくれる。

今回、遠い山興村から遥々湘南へ来たのは両親の休養のと、葉山の別荘から少し離れた茅ヶ崎で催される国民的バンドの地元公演をナマで聴くためだ。残念ながらチケットは取れなかったが、球場での講演で、わざわざ外からでも見えるようにスクリーンが設置されているとのことだ。

公演開始は夕方。それまでは江ノ島やその周辺を観光することにした。絵乃(えの)にとって、江ノ島(えのしま)という響きは何だか親近感があった。

江ノ島の展望台から一望する大海原に地球の丸さを実感し、島のノラネコたちと触れ合ったり、名物の『しらす丼』を味わって満足した絵乃たちは、竜宮城のような駅から電車を乗り継いで茅ヶ崎へ向かった。絵乃が住む地方の人々は日頃からあまり電車に乗らない上、

乗ったとしても必ず座席が空いている。絵乃は15両編成の電車でも座れないどころか乗り切れないくらい混んでいる。人が鮨詰めになった蜜柑色（みかんいろ）の電車を見て神奈川の人の多さに圧巻された。

◇◇◇

茅ヶ崎に着いて、バンドの公演開始まで時間があるので絵乃は一人で勝手に両親の前から居なくなって砂浜を裸足で散策していた。もちろん後で怒られる事になる。

◇◇◇

ざ～、ざ～、ざぱぁ～ん。

山奥に住む私にとっては聞き慣れない波の音。歩き慣れない砂浜の感触。私は大きい貝殻も、小さい貝殻も、波で削られて角が丸くなった緑色の硝子の破片なんかも拾い集めて観察していた。硝子の破片は綺麗だから持ち帰る事にした。

小さくてかわいいシジミ貝、ハマグリだか何だかよく分からない大きな貝、耳に当てると波の音が聞こえるという大きな巻き貝も落ちていた。私はその巻き貝を拾い上げて波の音を聴こうとした。

「う…」

それを持ち上げたら牛糞に似た強烈な臭いがしたので、私は中に何かが入っていて、奇妙な汁なんかが出て来ると嫌なので、それをそ～っと砂の上に置き、何事もなかったかのように再び歩き出した。

とはいえあの臭いは嗅いだ者の鼻の奥深くにしつこく、しぶとく残

る。あまりにも強烈で混乱しそうに、いや、混乱しているのかもしれない。

とりあえず私は夕日と対面して、江ノ島に背を向けて、『烏帽子岩(えぼしいわ)』が見える岩場へと歩き続ける。岩場を登るとテトラポッドで大きな波が打ち砕かれ、岩場の覚束ない足元とシンクロして恐怖を増幅させた。

「これが、サザンの歌に出て来る烏帽子岩…」

しかし恐怖感はすぐに吹き飛んだ。歌に出て来る烏帽子岩の現物を目にして、胸がドキドキした。

「烏帽子岩、見てるの？」

「はっ！？」

背後から気配もなく、私と同い年くらいの蓬色(よもぎいろ)の半ズボンと黒いランニングシャツを着た角刈り頭の男の子が話しかけてきた。

「気配もなく近寄って来るなんて、あなた、ただ者じゃないわね！？」

「いや～、それは波の音で足音が掻き消されただけじゃないかな」

「そ、そうかもね…」

ごもっともな意見を言われて納得するしかないのが、何かしてやられた気がして悔しかった。

「ねぇ、何処から来たの？　この辺じゃないよね」

「なんでそんな事まで分かるの！？　あなたやっぱりただ者じゃないわ」

「これが、サザンの歌に出て来る烏帽子岩、なんて言ってたら分かるよ。この辺の人にとってはいつもの岩だから、気にも留めない事だってあるよ」

またも的確な返事をされて、私は成す術もなかった。村で一番賢い子供（自称）のプライドに泥を吹っ掛けられた。上には上が居るって、こういう事か。

「そうよ、遠い山から来たの」

「へぇ、名前は？　僕は稲村健太（いなむらけんた）」

「腰越（こしごえ）、絵乃（えの）」

「ははは、山奥に住んでるのに凄く湘南らしい名前だね」

「え？　なんで？」

「うん、鎌倉に『腰越（こしごえ）』っていう所があって、腰越のすぐそこに『江ノ島（えのしま）』があるよ。まぁ僕の苗字も、同じ鎌倉に『稲村ヶ崎（いなむらがさき）』っていう所があるんだけどさ」

「稲村ヶ崎は知ってるわ。有名だもん」

話しながら小さな蟹やゴキブリみたいな虫がうじゃうじゃ駆け巡っ

ている岩場を下りて、さっき一人で辿った砂浜を今度は二人で歩く。

「絵乃ちゃんって可愛いね」

「可愛い？　私が？」

私が可愛い！？　こけしみたいな頭の私が可愛いだなんて…。

お父さんにも言われた事ないのに…。

それはないか。

でも、そんな事言われたらキュンときちゃう。だって、女の子だもん！

「うん、可愛いよ。こけしみたいで。頭、撫でていい？」

……、プツン。

私の中で、何かが切れた。

「いっ、言ったわね！？　私が気にしてるこけし頭の事言ったわね！！」

「えっ！？　ご、ごめん！！　そんなつもりじゃなかったんだ」

◇◇◇

うぁぁ、どうしよう、絵乃ちゃん怒らせちゃった！！　まだ会ったばっかりなのに、もう会わないかも知んないのに！！

「ええ、分かってるわ。だって、健太君、優しい子だもん」

？？？

「え？　僕たち、さっき会ったばっかりなのに」

えーっ！？　絵乃ちゃん何！？　この冷静な切り返し。怒ってるんだよね！？　いや、もう怒ってない！？　寧ろ褒められてる！？

「分かるわ。だって、私は村で一番賢い子供だから。でも今回は私の完敗よ。何年か先、またあなたに会ったら、今よりもっと賢くなって、綺麗になって、見返してあげるわ」

村で一番賢い、って言ってるよ。自分で。絵乃ちゃん、突っ込み所多そうだなぁ。

とりあえず、もう怒ってないみたい。

ほっぺがぷにぷにしていそうで、こけしみたいに可愛い女の子は右手を差し出した。僕も右手を差し出して絵乃ちゃんの手を握った。

「うん、楽しみにしてるよ」

絵乃ちゃんとは、きっとまた会える。そんな気がした。

「またね、健太君」

絵乃ちゃんは微笑んだ。その笑顔を見たら、僕の胸はくすぐったくなった。

「うん、またね、絵乃ちゃん」

握った手を解いて、絵乃ちゃんはサイクリングロードに沿うボードウォークで待つ、きっとお父さんとお母さん（？）の元へ歩いていった。

二人の元へ辿り着くと、何故か絵乃ちゃんは怒られていた。僕はそれを見届けて、一人で近くにある家に帰った。

◇◇◇

健太君とお別れした後、私はお父さんとお母さんの元へ戻ったら怒られた。勝手に離れて散歩したのがまずかったみたい。

心配させちゃったんだね。ごめんなさい。

陽が沈みかけた頃、国道沿いの球場近くまで歩いて向かった。いよいよ国民的バンドの地元公演が始まる。

◇◇◇

公演が始まった。

まずは前座から。前座も国民的男性アーティストで、彼は切ない歌からプレイボーイな歌まで多様な楽曲を披露する。勿論凄まじい盛り上がりだ。そしていよいよメインの登場。演奏前、ヴォーカリストのトークで会場の内外は熱気に染まり、茅ヶ崎の街に、茅ヶ崎の野球少年だったミュージシャンの声が響き渡る。

◇◇◇

あの、国民的バンドの演奏が今、すぐそこで、ナマの声が私の耳に、小さな胸に、心に染みる。まるで夢でも見ているような、はたまた魔法にかけられたような、敢えて言うなら胸が『浮き上げられる』感覚。健太君も来てるのかな？

本当は良くないのかもしれないけれど、私たちは国道の路側帯のガードレールによっ掛かり、球場に設置されたスクリーンを見ながら公演の様子を見る事にした。足元にアオダイショウ（ヘビ）が這っているけれど、私は気にしないし、左右の人々は演奏に酔いしれて気付いている人は少ない。

それからあっという間の数時間、数々の名曲や、知らない曲に心を打たれ、幻想的な時間を過ごした。一番印象に残ったのは、知らない曲だけれど切ない曲だった。

今年の夏はきっと、私にとって一生忘れない夏になる。

4，絵乃の海岸物語（後書き）

この物語の登場人物の苗字は地名から取っています。この物語の登場人物の苗字は前作同様、地名から取っています。

『あいはぐ』は順不同で話を執筆していて、第7回目の話や絵乃が高校生になってからの話も出来ています。元々は絵乃が高校二年生になった頃から始める予定であった経緯です。

5，山興村

西暦２０００年１１月。

ミレニアムの秋も山興村は例年と変わりなく紅葉が文字通り紅に染まり、銀杏（いちょう）は足元を金色（こんじき）に。二色のコントラストが村を囲む山々や広々とした校庭を情熱的でゴージャスな、しかしどこか切なく淋しげな世界を演出していた。

それはきっと、やがて冬が訪れる前に、森の妖精がくれる今年最後の、そして今世紀最後のプレゼントなのだ。

◇◇◇

浦佐洋子（うらさようこ）、小学六年生、十二歳。村の子供たちにとっては強くて頼りになるお姉さんのような存在で、髪型は『こけし頭』の絵乃とは違った、風に靡（なび）くさらさらなショートヘア、意志の強そうな目や口は彼女の性格をそのまま表している。身長は１４５センチ、すらっとした体格で、性格とは裏腹に華奢だったりする。

◇◇◇

秋といえば食欲、スポーツ、学問など、夏の暑さが和らいで動きやすい季節。山興小学校でも小さな運動会や遠足などの行事がある。私は日々宿題に追われながら小学生最後の秋を下級生たちと遊んだり、時に一人で村を出て遠く離れた市街地へ出掛けたりした。

そして今日は高学年だから同じ課題を出された五年生の弱々しい泣き虫な男の子、高上守（たかがみ まもる）と山興村の歴史について調べる事になった。課題を片付ける早道は村役場に行って村長から話を聞いたり資料を貰ってそれを纏めたレポートを作ればいい。

私たちは役場に向かいながら河原や森の中を散歩して、赤みがかった秋の山々を見上げ、ふかふかの落ち葉の絨毯に寝転べば、降り注ぐ紅と黄金が彩る空と高い高い木々が二人を包んだ。

さらさらと葉の掠れる音に混じって聞こえる小鳥の囀（さえず）りや小川のせせらぎが身も心も安らぎの世界へと誘った。人間も自然と共に生きている事を実感する。

「ねぇ守、秋と言えば『秋味』と秋刀魚よね？」

こんな世界に身を置くと、夢うつつになってついそんな他愛のない会話をしたくなる。

「洋子ちゃん、お酒はだめだよ」

真面目な守らしい意見。

「未成年の飲酒が禁止されてる事くらい知ってるわ。ほんの冗談。じゃあこれから河原で秋刀魚釣りに行かない？」

「うん、それならいいね」

なんか違う、そこ納得する所じゃないわ。

でも、そんな天然な所がツボだったりして…。

「洋子ちゃんって大人っぽいよね」

すぐ隣に寝転んでいる童顔で澄んだ瞳の持ち主が木々を見上げながら言った。

「そうね、守よりはね」

私も空から目線を逸らさないで言った。あぁ、なんでだろう。ついそんな尖った言い方をしちゃう。まだ子供ね、私。

「僕も早く大人になって、ＨＥＩＮＥＫＥＮ（ハイネケン）飲んでみたいな」

「なんでＨＥＩＮＥＫＥＮ？　それに私だってまだ飲めないわ」

「秋味は飲むのにね。あの緑の缶が好きなんだ。結婚したら晩酌してね」

「け、結婚！？」

「小さい頃の約束だよ。でもその約束が曖昧なもので、実現したら凄いって事くらい、僕も知ってるよ」

「そ、そうね」

それはまだ幼稚園に通ってた頃、私の家でおままごとをしていた時にした約束だった。あの約束、守も覚えてたんだ。

「そろそろ行こうか、村役場」

「あっ、そうね、すっかり忘れてたわ」

二人はゆっくり起き上がって歩き始めた。落ち葉の上に寝転んで、秋の涼しい風を感じると気持ち良くなって、つい時が経つのを忘れてしまう。きっと森の妖精が二人の、二人だけの時間を止めたんだと思う。

この時に気付いていれば良かった。もっとこうしていれば良かった。

◇◇◇

公民館を兼ねた古い木造平屋建ての役場に着くと、村長室で村長から村に纏わる話を聞く。村長は白髪が頭の側面にしか髪が生えてないハゲだけど小柄で温厚だと評判の人物だった。

「村が出来たのは終戦直後。各地から疎開して来た人々が集まって山に囲まれた何もない小さな原っぱを開拓して出来た歴史の浅い村なんじゃ。じゃから標準語も含め色んな方言が村を飛び交っておる。山興村は山から荒廃しちまった国を、故郷を興す、つまりこの山に囲まれた村から国が繁栄する事を願ってその名前が付けられた村なんじゃよ。なんせこの国はアメリカに負けちまったからのう。この村の使命は人々の生活を豊かにする事なんじゃ。じゃから村人たちは人が住んでおらず戦争の被害も受けなかったこの土地を耕して空襲を受けた故郷の土地に食料を届けるため農業に励んだというわけじゃ。もし敗戦せんかったら『山興』という名前にはなっておらんかったかもしれんのう」

長々しい話をされると思いきや、意外と短時間で終わった。村長に

お礼を言って役場を出ると、空も紅に染まっていた。茜空に舞う紅葉は影しか見えず、暗くなってやがて何も見えない闇に包まれる空に恐怖感があった。

ぎゅっ。

守が私の手を両手で掴んだ。

「こ、怖いよ、洋子ちゃん」

「な、何言ってるの、私はこんなのちっとも怖くないわ」

本当は私だって怖いわよ。猫の手くらい役に立たない弱々しい手で握られただけでも握られないよりずっと安心しちゃうくらい。

きっと私も怖がってる事くらい、守は知ってる。だけどそれを口にしない。きっと守の方が私より大人なのかも。

そんな優しい守が、私は大好き。そんな事恥ずかしくて言えないけど。

◇◇◇

洋子ちゃんと守君が役場を出ていった。

私は村長としてこの村を守る義務がある。

第二の故郷、山興村を守る義務である。

第一の故郷、広島の記憶は生後間もなく疎開した私の頭の中には残っていない。

ただ、私たち家族が疎開した二日後、原爆で多くの親族を亡くしたそうだ。記憶有らずとも、故郷が焼け野原となってしまった事は侘

しい。故に私は子供たちに同じ思いをさせてはならない。次代の子供たちの故郷を守る、これぞ郷を失った長使命である。子供たちにはこれからもこの村で真っ直ぐ健やかに育って欲しい。これが私の切なる願いである。

山興村長
宮ヶ瀬　保

6，森との約束は守れるんだから名前負けなんてしてないわよ。ＢＹ洋子、心の

僕は高上守（たかがみ まもる）、小学五年生。あまり積極的ではない、というより無口で力もない僕は一つ年上の洋子ちゃんみたいに強くなりたかった。大切なものすら守れる自信がない僕の名前負けコンプレックス。

そんな僕は絵乃ちゃんと洋子ちゃんと三人で学校周辺で昆虫採集をしていた。洋子ちゃんが勝手に決めたターゲットはカブトムシ。

今、十一月だよ？　来月には初雪だよ？　カブトムシなんかいないよね。そんなツッコミすら出来ない僕。弱虫毛虫、つまんで捨てられそうな僕。

「洋子ちゃん、カブトムシなんかいないんじゃない？　もう十一月だよ？」

絵乃ちゃんよく言った！

「そうね～、いないわよね～、じゃあヘビにしましょう！　ヘビならまだ冬眠前だから見つかると思うわ」

へ、ヘビ！？　毒あるよ！？　アンタ死ぬよ！？

と、言いたい。

「うん、ヘビならまだ居るね」

いやいや、なんで納得しちゃうのさ絵乃ちゃん！！

足元の落ち葉は踏むとサクサクして、その下にあるグンニャリとした土に溶け込み腐葉土になる日も近そうだ。

少しじっとしていると頬っぺたが痛くて冷たくなる。そんな季節にヘビ狩り？　ヘビさんだってそろそろ寝たいでしょうに。

「ねぇ守？　なんでさっきから私の後ろに居るの？」

！？

「あ、あれ？　そういえば、なんでだろう」

いつヘビが出て来てもおかしくない森の中で、僕はいつの間にかそれに怯えて洋子ちゃんの後ろを歩いていた。ヘビは踏み付けると咄嗟に足に噛み付く。それと同時に体内に毒を注入して、やがて足から腐ってしまう。

僕はそれが恐くて洋子ちゃんを盾にしていた。

女の子を盾にするなんて、弱虫毛虫どころか最低人間だ…。

「そう、私を盾にしてたんだ…」

「うぅ、ご、ごめんなさい」

「ううん、今回は許してあげる。だって…」

「うひゃーっ！！」

洋子ちゃんの背中ばかり見ていた僕は、彼女が両手で掴んでいる毒ヘビのヤマカガシに全く気付かなかった。

「いつの間に捕まえたの！？」

「さっき」

僕は危険な毒ヘビに自ら近寄っていたのだった。

「洋子ちゃん、私もヘビ捕まえた～」

「ぐひゃ～っ！！　な、何してんの絵乃ちゃん！！」

「凄い、絵乃ちゃん大猟じゃない」

絵乃ちゃんは両手でヘビを一頭ずつ掴み、首にも垂れ提げ、合わせて三頭のヘビを捕まえていた。

「でさ、このヘビたちどうしよう？　今は首掴んでるから噛まれないけど放したら…」

洋子ちゃんの言う通りだ。下手に逃がしたりしたらこっちが襲われるかも。

「大丈夫、噛んだりしないよ」

絵乃ちゃんが言った。

「森の妖精さんが噛まないようにヘビさんに言った。そう言ってる」

森の妖精さん？　絵乃ちゃんは霊感体質らしいけど、生で霊感を働かせているのを見るのは初めてだった。

「本当なら噛んじゃう所だけど、今まで通り自分たちが棲んでる森をきれいに使ってくれれば見逃してあげるってヘビさんも言ってる」

そういえば富士山の森が汚れてるとか、あちこちで伐採が進んでいるなんて話を聞いた事がある。この村には観光客なんて来る事もほぼないし、村人たちは時に必要な木材をこしらえる時に木を伐採するけど、森と人間との約束の中で上手く共存している。だから森が汚れたり破壊された事はない。

こうしてヘビと和解した僕たちは数日後、捕まえて驚かせてしまったお詫びとして飼育小屋で飼っていた鶏が産んだ無精卵を幾つかヘビの巣穴の前に置いたのだった。

名前負けしてて、弱虫で、毛虫で、つまんで捨てられそうな僕でも毒ヘビと解りあえた気がした。

7，寒くても、こころほかほか、白い村

２００１年１２月、村に２１世紀最初の冬が訪れた。

辺り一面は雪景色。放っておくと家が埋まってしまうので、村の人々は雪掻きに追われる毎日。

腰越家では絵乃の父が家や小屋の屋根から一晩でたっぷり積もった雪を落とし、母は自動車や家の周囲、父が屋根から落とした雪を一輪車に山盛りにして積んで近くの水路に流していた。

四年生で十歳の絵乃は冬休み中だけ学校から預かった黒くて目が赤い二歳の雌ウサギ、『ラビット』を世話したり、宿題の社会科レポートを作成していた。絵乃はレポートの題材としてこの年の９月１１日にニューヨークのワールド・トレードセンターなどで起こった世界同時多発テロを取り上げた。絵乃にとってあの光景は、阪神・淡路大震災以来の地獄の映像だった。

それと、ウサギの『ラビット』という少々ナンセンスな名前は絵乃が付けたものだ。

しかし、絵乃も宿題やラビットの世話があるからといって家の手伝いをしない訳にはいかない。作業で疲れた両親に温かい緑茶や煎餅などの菓子を用意して、電気ポットにお湯を入れると、余った時間で父が屋根から落とした雪を利用して雪だるまを作り、雪の片付けに協力したりと結構忙しいのだ。

灰色の空、こんこんと舞う大粒の雪。襟から白い“ぼんぼん”が二つ垂れ下がった、もふもふしたジャンパーを着ていても、冷たい空

気は容赦なく小さくて華奢な絵乃の身を刺す。

この地方の、さらさらしていて纏まりにくい雪に苦戦しながら、それでもテニスボールほどの小さな雪玉を夢中でころころ転がしていると、やがてそれは大きな西瓜ほどの玉となった。気が付けば白い毛糸の手袋の中に水が染み込んで手がかじかんでいた。こうして雪だるまの半身が出来上がった。上半身か下半身かはまだ決めていない。

◇◇◇

夢中で雪だるまを作っていたら手袋がびちょびちょになって両手がかじかみ感覚が麻痺してしまった。

誰も居ない居間の火燵に手足を入れ、蒼くなった唇を震わせ、歯が当たってかちかちと音を立てていた。こうしていると、なんだか気持ち良くなって動きたくなくなってしまう。まんまと『こたつの魔法』にかけられてしまった。お父さんとお母さんのために用意した緑茶の葉っぱを入れた急須に、電気ポットで沸かしておいたお湯を注ぎ込む。

カラカラカラ。

横開きの玄関の扉が開く音がした。

「お～い、絵乃ちゃん居るかね？」

私は早速居間から玄関に出る。

「あ、トメばぁちゃん」

トメばぁちゃんは腰越家から五十メートルくらい離れた隣の平屋建てで小さな家に一人で暮らしている腰の低い七十二歳のおばぁちゃんで、背の高さは腰が曲がっているので私と同じ百四十センチくらいだ。

「おぅ絵乃ちゃん、お父さんとお母さん公民館行ったべよ」

「そうなんだ。伝えてくれてありがとう。とりあえず家に上がって」

どうしてか、ノストラダムスの大予言が騒がれた二年前の夏から村の大人たちは公民館へ頻繁に足を運ぶようになった。

私は腰の低いトメばぁちゃんに廊下から右手を差し延べて段差のある玄関から廊下へ上がるのを助ける。私は

「よいしょ」の声でトメばぁちゃんを廊下に上げ、一回立ち止まる。

「ありがとう、優しい子だなぁ、絵乃ちゃんは。こりゃいいお嫁さんになるべ」

「結婚式にはトメばぁちゃんも来てね」

初恋すらまだの私は言った。

二人はすぐそこの居間までゆっくり歩き始めた。

「じゃあ頑張って長生きしねぇとなぁ」

トメばぁちゃんが火燵に入ると、私は二つの丸みのある小さな湯呑みにお茶を入れた。

「ありがとう、絵乃ちゃんのお茶はいつもやわらけぇ」

「私のお茶が、柔らかい？　なんで？」

不思議な事を言われた。私が入れるお茶はいつも濃くて苦味が少し強くなってしまう。とても柔らかな口当たりとは当の私ですら思えない。

「それはなぁ、このお茶には絵乃ちゃんの真心が篭ってるんだべ。絵乃ちゃんの優しい心がお茶に込められてるから、やわらかいんだよ」

私の心が篭ったお茶。そう言われると照れ臭くなってしまって、表情を緩めたままどうすればいいか分からなくなってしまった。でも、トメばぁちゃんの言っている事が少し理解出来る気がした。

こうしてトメばぁちゃんと、のほほんとした時間を過ごし、私は火燵に脚を入れたまま眠ってしまった。

……

「絵乃、絵乃？」

私を呼ぶ声が聞こえる。映る世界は歪んでいて、何が何だか解らない。

「…ん？　あ…」

目覚めると、もう外は白くて明るい夜になっていた。雪だるま作りの続きは明日にしよう。私を呼んでいたのはお母さんだった。寝起きで重たい頭を働かせて私は尋ねた。

「お母さん、トメばぁちゃんは？」

「今ね、絵乃のために肉じゃが作ってくれてるのよ」

程なくして居間の隣にある台所からお父さんが肉じゃがの入った陶芸家が作った粘土の大きな器をを持ってきて、火燵の上に慎重に置いた。火燵は我が家の食卓にもなっている。

「この肉じゃが、トメばぁちゃんが作ってくれたんだよ」

お父さんが言った。

トメばぁちゃんは時々こうして腰越家に来ておかずを作ってくれたり、夏は自家栽培の野菜を分けてくれる。

「起きたかい、絵乃ちゃん」

台所からトメばぁちゃんがいつも通り腰を曲げて出て来た。

「うん、美味しそうだね、肉じゃが」

すると、私が起きたのに気付いたのか、『ラビット』が居間に現れた。何と無くお腹を空かしていると直感した私は冷蔵庫の人参を取りに行って、ラビットの口元にそれをまるごと差し出した。ラビットは美味しそうにかじっていた。

今夜の食卓はトメばぁちゃんとラビットも加わっていつもより賑やかだった。トメばぁちゃんの肉じゃがは、ほっこりした気持ちが篭っていて、とてもやわらかかった。

7，寒くても、こころほかほか、白い村（後書き）

前回の話より先に書き上げたので2話連続投稿となりました。この話の執筆中はゲリラ雷雨が続いた夏真っ盛りでした。

8，ブロイラーガーデン

２００２年、私は赤ちゃんが出来る仕組みとか作り方なんかを知った六年生になった。きっとそんな事、まだ男の子を好きになった事がない私が知っていてもいなくても支障ない気がした。

飼育小屋に居るウサギの『ラビット』と鶏の『ブロイラー』の世話も今年度で最後。卒業してもまた遊びに来たいと思う。ちなみに彼等の名前は私が付けた。我ながらなんて親しみやすい名前でしょう。

五月、村は例年通り都心より少し遅い春を迎えた。
桜を舞い散らせる春風も私の『こけし頭』は靡(なび)かせられない。でもこれからは髪を伸ばそう。五つ年上で高校生の真(まこと)君に、このままだといつか『電動こけし』って呼ばれるぞ？　なんて言われたけれど、こけしは置物なのだから電気で動かす必要なんかないでしょう。そもそも『電動こけし』って何？

しかし、このあだ名はとても不名誉だというので、プライドが高いと自負している私はそれが許せない。だから伸ばす。こけし頭は卒業する。そう決心した。

日曜日の朝、白い長ズボンと羽根のような袖、フードにトサカが付いた鶏の衣装を着て飼育小屋へ向かった。今日は私が『ブロイラー』の世話当番だった。

私が飼育小屋の鍵を開けて顔を覗かせた途端、こっこっこっこっこけーっ、なんて声を発してちょんちょんちょこまかと足元まで近寄って来られると、可愛くてつい持ち上げて頬擦りした。

「お前は『こけーっ』しか言えないのか？　私はこけし頭だじょ？」

我ながら何を言っているのか、意味がさっぱり分からない。

普段大人しくしている私だけれど、それは騒いだりはしゃいだりしたいと思わないだけで、動物と触れ合っていると猫撫で声になる。それは家族以外、友達ですら知らない。

三歩歩くと忘れると言われる鶏。でも私の事は忘れていない。ブロイラーと私や学校のみんなとの絆は確かだ。

もちろん、ウサギの『ラビット』との絆も深い。ラビットは休日、私の家で預かっている。

「さて、散歩でもしましょうか、ブロイラー」

「こけっ」

みんなには内緒だけれど、私はブロイラーを飼育小屋からこっそり出して、一年生の時に建設した秘密基地に連れて行って遊んでいる。早速ブロイラーを右肩に乗せて出発した。鶏の衣装を着た人間に本物の鶏が乗っかって、まるで親子のようだ。

森の中に丸太が置いてあるだけの質素な秘密基地。そこには落ち葉や木の実が無数に落ちていて、ブロイラーのおやつになっている。私は木の実を啄（ついば）んでよちよちしているブロイラーの後ろをのそのそとしゃがみながらついていく。

「こけっ、こけこけっ」

ちょんっ、と回転し振り返って私の目を見て何か言った。

「ん？　人生で一番大切なのは何だって？」

ブロイラーの言葉を勝手に解釈した。

「それはね、愛と希望とサムマネー（少しのお金）よ」

「こけーっ！！」

まるで、そんな事聞いてねーよ！！　とでも言いたげに大きく声を発した。

「こけっ、こけっ、けこっ！！」

何かを必死に伝えようとしている。けど分からない。

秘密基地を出て、私は再びブロイラーを肩に乗せて舗装されていない集落のある道を歩く。

月曜日、突然だけど、飼育小屋の鶏が増えた。秋子先生が言うには、ブロイラーのお嫁さんらしい。

お嫁さんの名前は『ガーデン』にした。なんてエレガントな名前でしょう。

そういえばそろそろ飼育委員会に人間の新メンバーも加わる時期だ。

◇◇◇

命の尊さを学ぶ。それが学校での動物飼育の目的。私はそれが何を

意味しているのか、この時はまだ知らなかった。

９，大切なのは血縁より絆だよね？　ｂｙアスタ（前書き）

あくまでも小学生が主人公ですｍ（　）ｍ

9，大切なのは血縁より絆だよね？　byアスタ

僕は山興村に住む小学四年生、新治明日太（にいはりあすた）。友達からはアスタと呼ばれている。

山奥の村に住む僕は、全校生徒僅か六人の小さな学校に通っている。校舎は木造で、建てられてから五十年以上。

季節は五月、この村にもようやく桜が咲いた。学活中だけど、桜にうっとり。

「え～、今日から飼育委員にアスタ君が入りま～す♪♪」

教壇に両手を着いて立つ担任の美佐島秋子（みさしまあきこ）先生が教室に居る全校生徒に告げた。

美佐島先生は二十七歳、ショートヘアでスラッとした体型の美人教師として生徒や職員から人気の先生で、いわば学校のアイドルだ。ちなみに全学年、全生徒が同じ教室で学んでるからクラス担任の教員は一人しか居ない。

「アスタ君、動物さんたちのお世話、宜しくね」

「うん、宜しくです」

その日の放課後、早速飼育委員の仲間に入り、飼育小屋で鶏やウサギの世話を始めた。三年生までは動物の世話は危険だから彼等の世話をしていなかったものの、以前からウサギを撫でたりしていた。しかし、四年生からは飼育に強制参加となり、彼等の命を預かる事

になる。なので小さな学校で例え強制参加でも『委員会』という責任のある肩書きが付き纏う。らしい。

「おうアスタ！　今日からこっちでもよろしくな！」

「うん、よろしく！　湯沢君！」

湯沢君は活発でサッカーが五年生。だけど学校では一緒にサッカーしてくれる友達が一人しか居ないから、いつも校舎裏で一人、ボールって言う友達と遊んでるんだ。

飼育小屋に入ると、そこには二羽の鶏が居る。雄鶏と雌鳥が一羽ずつ。正におしどり夫婦の二羽は、玉蜀黍を粗挽きした餌を食べていた。

「コッコッコッコッ！」

「コッコッコッコッ！」

「コッコッコッコケーッコッコッコッ」

あれ？　なんか増えてる。三羽居る。しかもでっかいの。鳴き声棒読みだなぁ、でっかい三羽目…

「あら、アスタ君、こっちでもよろしくね」

鶏が喋った！　でっかいのが喋った！

じゃなくて、鶏の衣装を着ている六年生の絵乃（えの）ちゃんだった。絵乃ちゃんは活発なタイプではなく、ちび〇子ちゃんのようなおかっぱ頭、成績優秀で少し大人しいタイプだけど、たまに予測不能な行動を取る。やっぱり天才は何か違う…？

「ははは、よろしく…」

あれ？　絵乃ちゃん？

「絵乃ちゃん、何抱えてるの？」

「卵を温めてるの。そうじゃなきゃ鶏の衣装なんか着ない」

黄色いクチバシとトサカがどこか間抜けな衣装を着た絵乃ちゃんが無表情で返事をした。

……

翌日の放課後、普段着姿の絵乃ちゃんが四年生の教室に走って来て、

息切れしそうな声で僕に訴えた。

「ハァ、ハァ、う、生まれる…」

陣痛？

「絵乃ちゃんのお腹に赤ちゃん居るの？」

「そう、あなたの子よ」

ええっ！？　僕ですか！！　いつ絵乃ちゃんと結婚したんだろう？
それともドラマで見た結婚しなくても赤ちゃんが出来るって話は本当なの？

「それは冗談だけど、ヒヨコが生まれそうなの！」

息切れして思考能力が低下してるだろうに、よくそんな冗談が言えたもんだ。

絵乃ちゃんと一緒に飼育小屋に駆け付けると、既に卵は殻にひびが入っていて、親鶏のガーデンが卵を突（つつ）きながらヒヨコが生まれるのを手伝っている。親鶏がタイミング良く卵を突かないとヒヨコは死んでしまう事があるらしい。

「ふほ～っ、ふほ～っ、生まれる、生まれますぞ～ぉ、僕はもうすぐ空を見るんだ、あの青空を」

絵乃ちゃんが生まれそうなヒヨコに勝手な台詞を吹き込んでいる。
その口調はやや興奮気味だけど冷静で淡々としていた。

それから間もなく一羽のヒヨコは青空の下に誕生した。

僕は思った。この飼育小屋には雄鶏のブロイラーと雌鳥のガーデンが暮らしている。しかしガーデンはここに来てから日が浅い。

このヒヨコの父親はブロイラーなの？

１０，子供たち　みんな揃って　お引っ越し

「絵乃、ちょっと先の話だけど、お引越しする事になった。大丈夫、小学校を卒業するまでは引っ越さないから」

突然、お父さんからそんな話を聞いた。最初はそんなの信じられなかった。十二年間、私はずっとこの村で暮らしてきた。これからもずっと、この村で、この村の誰かと結婚して、子供を産んで、幸せに暮らしていくつもりだった。

「でも引っ越す事はみんなには内緒だよ？　どうしても、内緒にしなきゃいけないんだ。そうじゃないと、大変な事になる。絵乃も、みんなも、とても辛い思いをしてしまうんだ」

急に引越しだとか、みんなに内緒だとか言われてもどうすればいいのか分からない。

翌日の日曜日、私は学校の飼育小屋に行って動物たちの世話をしていた。

「ブロイラー、私、引っ越すんだって。友達には内緒だって言われてるんだけど、君たちには秘密にしなくていいよね」

「コケッ、ケコッ…　コケーッ！」

このニワトリ、バカそうに見えてもちゃんと返事するから凄い。つくづく感心。

ぴよぴよとヒヨコたちの声も響き、飼育小屋はうるさいくらい賑や

かになった。
雄鶏のブロイラーと雌鳥のガーデンが同居を始めてから日は浅いが、ガーデンは子供を産んだ。ブロイラーが父親だとは考えにくいが、そこは敢えて触れないようにしている。飼育委員での暗黙の了解だった。

「絵乃ちゃん、引っ越すの？」

「えっ！？」

しゃがんで出来るだけブロイラーと目線を合わせながら会話をしている私の背後に、在る筈のない姿が…。

「な、なんでここにいるの？　今日は日曜日よ？」

出来るだけ平静を装う。

「僕も今日、飼育当番だから」

背後にいるアスタは、実はある筈のある姿だったようだ。私はなんて間抜けなのだろう。動物たちのお世話は基本的に二人作業なのに。

「それより引っ越すって、本当？」

お父さんから秘密にするように言われていた引っ越しを早速友達に知られてしまった。しかし秘密だからといって誤魔化すのは友達のアスタに悪い。

「ええ、本当よ。でもいつ引っ越すかも、引越先も分からないわ」

「そうなんだ。実は僕も来年、引っ越す事になったんだ。引越先は、近くの街らしい」

なんて奇遇だろう。もしかして小学校か中学校、もしくは両方とも廃校になってしまうのかしら？

◇◇◇

月曜日、遅刻ギリギリで教室に入ると、私を除いて五人しかいない全校生徒が集まってざわざわと話し合っていた。

「おはよう、みんな、どうしたの？」

「おはよう絵乃。なぁ、絵乃も引っ越すのか？」

「ええ、もしかして大介も引っ越すの？」

「ああ、っていうか、この六人全員」

「うそ！？　なんで！？　もしかして中学校が廃校になるの？」

「さぁな、大人は事情を知ってるんだろうが、ぜってぇ答えねぇだろ。だから今日これから、それを探ろうと思う」

それから私たちは六人で手分けして、用事を無理矢理作って職員室に出入りしたり、耳を澄ませながら校長室の前をゆっくり通過したり、村の子供たちが引っ越さなければならない理由を探ろうとした。けれどそう簡単に情報は入らなかった。

１５時半、陽が少し陰り始めた放課後の教室で、私と大介は居残っ

て真実を突き止める作戦を立てていた。

考えられるのは小中学校の廃校ともう一つ。後者は絶対に避けたい答えだった。

いくら考えてもそれ以上思いつかない。

行き詰まり、大介がバンッ、と両手の平を机に叩きつけた。

「よし、こうなったら美佐島先生に直接聞きにいくべ！」

「そうね、駄目元でやってみる？　でも、どんな事実を突き付けられても、それと冷静に向き合う覚悟はあるの？」

「ああ、あるさ。でも事によってはみんな（下級生たち）には内緒だな」

「そうね。じゃあ、行きましょうか」

五年生の大介と六年生の私は、真相を突き止めるべく職員室へ勇み足で向かった。

11，いのちのゆくえ

私と大介は真相を知るべく、担任の美佐島先生を職員室から教室へ強引に連れ出して教卓の椅子に座らせ、本題に入る。

「先生、どういうことだよ？　なんで村の子供がみんな引っ越すんだよ？」

「私たちには教えて欲しい。私、家でお父さんに引っ越すのは内緒にするように言われたの」

「そうなんだ。でも、ごめんね、実は私にもよくわからないの。ただ、六人みんなが引っ越したら、この学校がどうなるか、分かるわよね？」

「ええ、分かっているつもり」

美佐島先生は困った顔をしながら言う。

「本当に理解してる？」

大介が喉を詰まらせて言った。

「…やっぱ、廃校になるのか？」

「あっ！」

「絵乃ちゃんは気付いたみたいね」

「何だよ！？　廃校以外に何があるってんだよ！？」

「大介君、ここの仲間って、私や他の先生とみんな以外にも、居るわよね？」

「えっ！？　何だよ、何なんだよ？」

「飼育小屋」

私の口調は暗く、重たい。

「この学校がなくなったらブロイラーやラビットたちはどうなるの！？　どうするつもりなの！？」

動物たちの危機に気付いた途端、私の頭の中にまた同じ事を繰り返してしまう懸念や焦りと恐怖が生まれ、肩が急に重くなり、まるで胸の中をねこじゃらしで撫でられるような、いやな感じがした。

もう動物たちを犠牲にしたくない。

「先生は、動物さんたちがどうなるかはわからない。廃校になる可能性が高いっていう事しか知らないの。ごめんね」

言って、美佐島先生は申し訳なさそうな面持ちで教室を出て行った。

母校が廃校になる。それだけでも一大事だけれど、私は鶏やウサギでも同じ学校の仲間である彼等の『命の行方』が心配でならなかった。

11，いのちのゆくえ（後書き）

鶏の命がどうとか書いてる私は、この話を投稿する前に駅近くの店で焼鳥丼や塩チーズつくねなんぞを美味しくいただきましたm（｜｜）m

ケンタッキーもよく行きますm（｜｜）m

命に感謝ですm（｜｜）m

ありがとう。美味しかったよ（；∇；）／~~

12，今度こそ、護らなきゃ

母校がなくなること、母校がなくなれば飼育小屋の動物たちが保健所に連れて行かれる可能性があること、知りたくなかった未来、でも知っておいたほうが良い未来。村の子供の中でそれを知っているのは、私と大介のみだろう。

私たちの課題は二つ。

一つは動物たちの命を護ること、もう一つは母校の山興（やまおこし）小学校の廃校を止めること。

そうは言っても、一体何をすれば良いのか検討がつかない。私たち二人は夕陽が差す放課後の教室で懸命に知恵を絞って考えた。

「決めたわ、飼育小屋の動物はうちで引き取ろうと思う。先生や両親と相談してみるわ。それ以外、私には思い付かない。大介はどう？」

「賛成だな。俺もそれが良いと思う。俺も家に帰ったら親に相談してみるよ」

◇◇◇

帰宅した私は両親に行き場を失う飼育小屋の動物を引き取って育てたいと話を持ちかけたが、二人とも難しい顔をした。

「動物にはね、人間と同じで命があるのよ。動物を飼うってことは、絵乃は一つのとても重い命を背負わなきゃいけなくなるの」

「分かってるわ。だからこそよ。だからこそ行き場を失うあの子たちを放っておけないの！」

「その気持ちはお母さんにも分かる。でもそれにはお金が沢山かかるし、病気や怪我をしたら山を下りて市街の動物病院に連れていかなきゃいけないのよ？　あなたにそれが出来るの？」

市街までは約３０ｋｍ。車で約５０分、、自転車で２時間半、ＪＲ運賃４８０円の営業キロに当て嵌まる。その計算だと、休まず歩いても片道約八時間はかかるだろう。子供の私には無謀過ぎる距離。不幸な事に私の家には自転車がない。それどころかこの村で自転車など滅多に見かけるものではないし、鉄道やバスさえもない。

「言っとくけどお母さんはノータッチだからね。病気になった時も全部アンタがやるのよ」

そこで黙っていた父親が口を開いた。

「おいおい、それはあんまりじゃないか。絵乃はまだ年齢的に車の運転が出来ないんだ。せめて動物病院くらい連れてってやってもいいだろ」

「これも一つの勉強なの。自分の事は自分でやり通すべきよ」

「だからといって動物の命を犠牲にする必要はない。それは別の機会を設ければいい」

「うるさいわね、アンタは黙ってて」

その母親の言葉が気に障ったのか、父親は怒りはじめた。

「黙っててだと！？　俺だって絵乃の事を考えてるんだ！！　それに絵乃だって学校で動物を飼育出来ないからうちで飼うって言ってるんだろ？　俺だって動物を飼う事は難しいと思うし賛成出来るかと言えば考える必要はあると思う。けど今回絵乃が行き場を失った動物を飼いたいって言ったってことは、優しい心を持った良い子に育ってくれた証拠だと俺は思ったよ。それをお前は病気になっても知らないとか、否定的な言葉ばっかりかけてるじゃないか！！」

「優しいとか優しくないとかじゃなくて、実際問題飼えるかどうかって話をしてんの！！」

それから話は脱線し、単なる夫婦喧嘩が延々と続いたので、私はそこからそっと居なくなり自分の部屋に戻った。

物心ついた頃から夫婦喧嘩の多い両親。週一回はしていると思う。私はその度、頭が重くなり、胸焼けのようにざわざわした症状を発し、現実から目を背けて耳を塞ぎたくなる。

ベッドに飛び込むとそのままふわふわした枕に顔を埋め、目を閉じて知恵熱や複数の要因が引き起こすストレスで怠い頭を休めた。すると、怠い気が枕に吸い込まれて行くような感覚があった。そのまま意識も吸い込まれそう。

◇◇◇

度々、小さな頃の事を思い出す。

私が五歳だった頃、今は引っ越してしまったけれど、近所に新婚の夫婦が住んでいて、ドラという雌猫を飼っていた。やがてドラは三匹の子猫を産んだ。

その少し後、ほぼ同時期に夫婦にも赤ちゃんが生まれた。

私はドラと遊ぶため、よくそこにお邪魔していた。お昼寝をして、目が覚めると隣にドラが一緒に寝ていて、それがとっても可愛らしい。

ドラと私は昼寝、子猫三匹はパタパタ走り回ったりじゃれあったり、そんな日々が続いていた。しかし、夏のある金曜日の午前中、雨が降っていた日のこと。無邪気に走り回っていた三匹の子猫が旦那さんによって突然ゲージに入れられた。三匹とも、目を潤ませながら私を見て、『ニゥ、ニィ』と、切ない声を発していた。

旦那さんが彼等を車に載せて行った。旦那さんと一緒に子猫たちが戻ることはなかった。

その理由を旦那さんに尋ねると、子猫たちはこれから赤ちゃんにちょっかいを出すかも知れないから保健所に連れて行ったと何食わぬ顔で答えた。

それから間もなく、その夫婦とドラは引っ越して、村から居なくなった。

私はそれを思い出す度、なんで保健所がどんな場所だか知らなかったのだろう、なんで、あの澄んだ眼差しの無垢な子猫を守れなかったのだろう、毒ガスで苦しませて、短すぎて惨(むご)い命の終わりを迎え

させてしまったのだろう、そんな悔しい思いになる。

自分たちの赤ちゃんのためという気持ちはわかる。

だけど…。

だけど…。

命の重さは、みんな一緒なのに…。

その時から、もう犠牲は出したくない、人間の都合で動物に惨い運命を辿らせてはならないと思念するようになった。

「今度こそ、護らなきゃ」

もう誰も犠牲になんかさせるもんか！

１２，今度こそ、護らなきゃ（後書き）

保健所では、猫だけでも年間１３万匹以上が毒殺されるそうです。面倒見切れなくて、引き取り手も見つからなければ、せめて動物愛護病院にでも預けて欲しいものです。

13，最上級生として

月曜日、二日ぶりに飼育小屋を訪れた。ヒヨコたちは順調に成長し、顔つきがニワトリらしくなってきた。

「絵乃ちゃん、またニワトリの衣装…。さっきまで普通の服着てたのに、いつの間に着替えたんだね」

後から来たアスタが私の格好にツッコミを入れた。

「着替えてるんじゃなくて、普段着の上から被ってるの」

彼は私の事を不思議だとか、意味わからないとか思っているでしょう。当の私も意味わからない。

飼育小屋の中をさっと箒（ほうき）で掃いて外に出る。見上げれば青空。梅雨時にしては珍しく雲一つない快晴だ。カラッとした陽射しがもやもやした気分を少し取り除いてくれる。

ふと校舎の方を眺めてみると、村では見かけないスーツ姿の　中年男たちが校長に迎えられているのが見えた。この学校が廃校になる事と関係ありそうな臭いプンプン。

そうか、やっぱり廃校になっちゃうんだ…。

動物たちの事で頭がいっぱいだったけれど、やはり自分が巣立つこの世界でたった一つ小学校が無くなってしまうのは素直に淋しくて、切なくて、実感が沸かない。

私もこの村から居なくなる。引越先は遠く離れた神奈川県、葉山（はやま）の森の中にある別荘に決まった。別荘とはいえ、今住んでる家より設備は充実していて、本荘にするには申し分ない。そして何より、湘南と呼ばれるその地域は人口もペットも多く、周辺に動物病院が幾つかあるからブロイラーたちとも安心して暮らせる。

「絵乃ちゃん、引越したらブロイラーとガーデンのこと、よろしくね」

「ええ、アスタはラビットと仲良くね」

廃校後、飼育小屋の動物たちは上級生三人で分配し、二羽の鶏（ダジャレか！？）を私、ウサギのラビットをアスタ、ヒヨコたちを大介が育てることになった。

「もちろんだよ、絵乃ちゃん。なんでこの学校、無くなっちゃうんだろう？　ずっとみんなと一緒に遊んだり勉強したりしてきたのに、それが来年の四月には、出来なくなっちゃうんだよね」

「そうね、でも四月まではみんな一緒よ？　それに引越してからだってまた会えるわ。だから連絡先教えてね？」

「うん…」

淋しそうに目を細めるアスタを見て、胸が締め付けられた。

来年、桜が咲く前にずっと一緒だったみんなが離ればなれになってしまう。私の家で時々夜ご飯を一緒に食べるトメばぁちゃんともお別れになってしまう。

いま目の前で下級生が、仲間が困っている、淋しそうにしている。特にアスタみたいな素直な子が弱っていると助けたくなってしまう。母性本能は十二歳の私にもしっかり備わっていて、その上、最上級生としてしっかりしなくてはいけない。そんな緊張感があった。

「コケッ、コケコケッ！」

「どうしたの？　ブロイラー」

両翼をバサバサさせて私に訴えかけるブロイラー。

まるで「元気出して！」とでも言っているよう。

「ありがとう。なんか励まされたわ」

「コケッ！」

感謝の言葉を告げるとブロイラーは右翼だけを挙げ、敬礼のように返事した。

「どういたしまして！」

私にはそう聞こえた。

頑張ろう、大変な時こそ元気出さなきゃね。

１４，子作りしましょ！？（前書き）

秋が深まり、残された時間は少ない。

「俺に大学行く頭なんかねぇよ。就職だよ就職。でも東京に本社がある大企業だぜ？」

「そうね。もし浪人したらどうする？」

「縁起でもねぇ事言うなよ」

１４，子作りしましょ！？

火曜日の放課後、絵乃はブロイラーを右肩に、ガーデンを左肩に載せて一年生の頃に作った秘密基地を訪れた。六年間維持してきたこの基地ともお別れになる。

二羽を肩から降ろして倒木のベンチに座りながら膝に肘をつき手の平で顎を抱えてずっと続く森の木立をぼんやり眺め考え込む。

小学校が廃校にならなければ下級生たちは転校せずに済む。今の私に出来るのは、期待は薄くても学校職員に廃校反対を強く訴えてみよう。今までだって反対とは言ってきたものの、決定事項だからだめだと言われ続けた。今、私に出来る事を思いつく限り実行してゆく。これが最上級生として、みんなにしてあげられる事だと。絵乃が考え込んだ末に出した結論だ。

◇◇◇

家に帰ると、絵乃が低学年の時によく遊んでもらった高校一年生の真と中学三年生の洋子が来ていた。

「おっす！　久しぶりだな！」

「久しぶり～、お邪魔してま～す」

「久しぶりね。突然どうしたの？」

「友達の家に来るのにどうしたもこうしたもねぇだろ？　俺ね、東京にある大学、略して東大に行くことになったんよ。んで、村を離

れるから挨拶回りに来たってのが事情ってわけよ。ってか洋子が何故か俺に付いてくる意味がわからんよ」

「わ、私は、ほら、その、真が一人で行くのは心細いと思って一緒に行ってあげてるのよ？　感謝しなさいよね？　っていうか行く事になったって、まだ高校入ったばっかりじゃない」

この二人は小さい頃からいつもこうだ。真は洋子ちゃんに意地悪を言ってツンツンした台詞を吐かせて愉しみ、洋子はそんな目論みなどに気付かず、まんまとそう言う。洋子が真を好いてるのは絵乃から見ても明白だ。

腰越家の居間のちゃぶ台に近所に住むトメばぁちゃん以外のお客が来るのは久しぶり。しかも両親も留守の家に無断で上がり込まれるなど滅多にないが、この村の人々は家に鍵をかけるなどほぼないので仕方ない。

絵乃はお菓子を出すためにキッチンへ行った。居間は再び二人きりの空間になった。

「本当は大学行く気なんかないんでしょ？」

「そこは突っ込まないでおくれよ。でも、俺の挨拶回りに洋子が無理矢理付いて来たって言えば、機転利かせていつものツンツンっぷりを発揮してくれるって思ったわけ。ま、俺を頼りにしてくれたのは気分悪くもないけど」

「だって、味方は一人でも多いほうが、絵乃ちゃんだって心強いでしょ？」

「ああ、俺もしっかりしねぇとな。いつまでもガキじゃねぇ。愛した女と後輩くらい守れなきゃ男が廃(すた)る」

「フッ、まだ十六のくせに」

「お前なんかまだＪＣ（中学生）だろ？　でも、洋子が俺に泣き付いて言ったこと、ちゃんと真っ正面から向き合うから」

キッチンから絵乃が戻り、カキピーや煎餅といったお菓子の袋がちゃぶ台に並ぶ。

「二人とも、何を話していたの？」

「ああ、洋子がいつまでも子作りさせてくれないから交渉してたんだ」

すかさず洋子は、バカ！　十二歳の子になんて事言うの！？　と真の後頭部をひっぱたいた。

15，Dead or Alive

去る夏休み、真は就職試験に向けて毎日勉強していた。
勉強する範囲が広い上に、知能テストのような試験問題が多くて頭は血管が詰まったような感覚で重たい。
そんな中、幼なじみで恋人の洋子から『真に聞いてほしいことがある。外部に言い振らしたら何があるかわからない、けど、マジだったら絶対ヤバイ』と相談された。何やら聞いてはならないようなことを聞いてしまったのだろう。

◇◇◇

「はぁぁぁぁ！？　なんだべそれ！？　ってかマジなら黙ってらんねぇべ。今すぐ抗議しに行くぞ」
洋子が告げたのは、村人の間で騒がれている山興（やまおこし）小学校廃校を大きく上回る事態だった。よく聞く話ではあるが、自分の身に降り懸かると不安や焦りが込み上げ、力なき自分にはどうしたら良いか分かず、脳はフリーズ状態になってしまった。
「ちょっと待って、だから慎重を欠くとマジでヤバイかもだって。それにたった二人で立ち向かったところで勝ち目ないよ。
そこで私は考えたんだけど、この情報は村ではまだ公務員しか知らない筈。
だから、小学校の生徒だけに伝えて公務員たちに集団抗議する。もちろん、みんなには保護者をはじめ大人には絶対内緒にしてもらう。大人の中には立ち退き料を貰えるから賛成する輩もいると思うの。

これは私たちの一生を左右する賭けよ。村を水底に沈めるなんて、絶対に許さないんだから。なんとしても廃村を撤回させるわ」

村は今のところ、校舎の老朽化と生徒数不足による維持困難のため、小学校を廃校にするとの発表はしていたものの、廃村にしてダムを建設するなど全く知らせていない。村人に意見させず、発表時期を出来るだけ延ばしてダム建設計画を強引に推し進める計画だろうか。

二人は先ず、小学校の最上級生である絵乃にそれを知らせるため、腰越家に来たのだった。

三人でちゃぶ台を囲み、お茶をしながら冗談を言ったりして談笑して、会話が途切れたのを見計らい、洋子は一秒、息を呑んで話を切り出した。

話を聞いた絵乃は意外なことにあまり驚いた表情もなく、少し考え込んだ顔をして、至って冷静に言い始めた。

「そう。もしかしたらって、思ってはいたけどね。分かった。私も抗議運動に協力するわ。けど大人は汚い生き物よ。だから他の生徒は巻き込まないほうが良いと思う。協力してもらうにしても、五年生の湯沢君までね。アスタ君や他の子には、利益を求める人の醜い姿なんか、まだ見るべきではないわ」

とても小学六年生の子が吐くような台詞とは思えず、二人はある意味、廃村以上に驚愕して呆気にとられた。

しかし、その通りだ。まだ小さな子供たちに、人の醜さなど見て欲しくないし見るべきでない。協力してもらうのは五年生の湯沢君までとした。

その後すぐに三人で湯沢君の家に行って彼を呼び出し、絵乃の時と同様に廃村計画がある事を告げ、協力を請うた。

「おうっ、そういう事なら俺に任せろ！　戦いのニオイがするぜ」

湯沢君は廃村計画に驚いたというよりは、戦いのニオイに闘志を燃やし、まるで全身から炎のオーラが出ているようだった。

今日は作戦を練り、そして明日、村の存亡と村人の未来を賭けた決戦の火蓋が切り落とされる。

16，ペルソナ

絵乃たちが村を守ろうとしている一方で、ダムの建設を目論む大人たちも当然計画進行をしている。廃村決定をいつまでインサイダーにしておくか、立ち退き料をどれくらい支払えば村人は納得するか、村の職員にどの程度メリットがあるかなど、総合的に計算している。

ダム計画は国や県の職員、村長をはじめとする村役場の職員、学校やその他公的施設の職員たちによって進行する。

この中で建設反対の意見が出れば、計画のトップを務める者、この場合は国の職員が納得しない限り、それは必ず押し潰される仕組みになっている。

◇◇◇

平日の午前、山興（やまおこし）小学校では通常授業が行われた。

昼休み、校長と全学年全生徒一括担任の美佐島秋子が校長室で話し合っている。

校長室はベージュのカーテンが閉められ薄暗く、頭上に立てかけられた額縁に収まった賞状、鼠色に塗装された棚の中には大小のトロフィーが幾つか並ぶ。

「校長、落ち着いて話したいからタバコちょうだい」

「ほう？　1ミリグラムで良ければどうぞ」

校長は言って、卓上の大理石製のライターで着火してから秋子に差し出した。

秋子は一口吸った。

「ぐほっ、ごほんっ！　ゴメン、私、生まれて初めて吸ったけど、無理だわ」

「そうかい。君がタバコ吸うなんて意外だと思ったが、結局何がしたかったんだい？」

「自分に酔いしれたかっただけ。はぁ、なんで私ってバカなんだろう」

「だから男が寄り付かないのかい？」

「そうなの、だからいい男紹介してよ」

「ここにいるじゃないか、いい男」

「えっ！？　何処どこ？」

いい男が見当たらないようなので、校長はここだよ、ここ、と言って自分を指差した。

「私ね、ハゲてて尚且つ白髪の変態には興味ないの」

秋子は微笑んで校長を否定した。

校長と秋子はいつもこんなどうしようもない会話をしている。生徒には見せない職員たちの一面だ。

「で、わざわざハゲで白髪だけどイケメン校長の部屋、つまりこの校長室に来た訳はなんだい？」

「は？　イケメン？　あぁ、イケてないメンズの略ね。でさ、あなた、火の車みたいだけど、村が沈めば少しは楽になるの？」

「むむっ、少しどころじゃないよ美佐島先生、ダム計画が実現すれば大赤字が一転、億万長者だよ。へへっ、金は天からの回りものだなんて、到底信じ難かったが、あれは本当のようだね」

「そのくらいのサプライズがなきゃ、安月給の公務員なんてやってらんないわ」

授業開始前の予鈴が鳴ると、秋子はそのまま教室に向かい、教壇に立った。

17，村の音楽会

村の存亡を賭けた闘いが繰り広げられている山興村。そんな最中でも常に緊迫しているわけではない。苦しい日々にの中にも、温かい日だってある。

◇◇◇

「みんな～、机を隅に寄せて練習始めるわよ～」

教壇から担任の秋子が声をかけると、子供たちは言われた通りに六つしかない机を教室の隅に寄せ、代わりにコンガと呼ばれる民族楽器を室内中央に運んだ。

午後、山興小学校では通常の授業を変更して音楽の授業が行われていた。授業参観日に保護者の前で発表するためだ。

演奏曲は知る人ぞ知る『アフリカン・シンフォニー』。アフリカの民族楽器で演奏するコンガのリズムと笛が奏でるメロディーが心地良い曲だ。

これを演奏するのは小学生にはかなりハード。特にソプラノリコーダーはビブラートの部分があるのでかなりキツイ。

それを自ら志願したおかっぱ少女が居た。

腰越絵乃、六年生の十二歳。

彼女いわく、最上級生のプライドに賭けて。だそうだ。

普段は大人しい絵乃の特技はエレクトーンとリコーダーの演奏、風呂掃除に居眠りなどなど、多岐に渡る。

そもそも、なぜ授業参観でいつもの授業風景を見せないかというと、保護者に子供たちが本当に頑張っているという証明をするためだ。通常授業では、その時だけ頑張っているように思われることもある。

なので山興小学校では常日頃、子供たちが頑張っている証拠として、伝統的に何かを発表する方式を採っているのだ。

この日は参観日前日。元々ハードな楽曲で、低学年の子は普段はピアニカしか吹かないのにビブラート部分を除くソプラノリコーダーを担当、そのビブラート部分を含め、全てを演奏する絵乃は特に苦労していた。

四年生のアルトリコーダー担当、アスタは手が小さくて思うように演奏出来ない。しかし、そんな中で五年生のコンガ担当、大介は身体全体を動かすポンポコした音を奏でる楽器でノリノリだった。

「いや〜ぁ、音楽の授業がこんなに楽しいなんてなぁ、いい汗かくぜ〜」

サッカー少年の大介は保健体育以外の授業には一切興味ない。じっとしているのが退屈だし、音楽は楽譜が読めない故に一層苦手だった。

「何言ってるの。こっちは息切れよ。ビブラートが全然出来ないわ。舌使いが上手くいかないの」

「じゃあ俺の下に生えてるマツタケで舌使いの練習するか？」

「そうね。むしり取ってバター焼きにして美味しく練習させて頂こうかしら？」

「や、やめてくれ～、俺の未来のベイビーのために…」

この小学生らしからぬ会話に秋子が突っ込む。

「こらっ、そんなネタ、他の子はわからないでしょ？　絵乃ちゃん、そういうのは専用のキャンディーで練習すればいいからね？」

「えぇ！？　突っ込むトコ違うべ！？　ってか専用のキャンディーって！？　アンタそれでも教師！？」

「キャンディー…　その手があったか…」

「絵乃も納得するな！！」

◇◇◇

本番当日、朝のリハーサルでも舌使いが上手くいかなかった絵乃は、持ち前のプライドが祟って教室の隅でしゃがみ込み、酷く落ち込んでいた。

「あんなにキャンディー舐めたのに、ポケットにもキャンディーいっぱいなのに…」

大介が話しかけた。

「ちゃんとリコーダーで練習したか？」

「ええ、したわ。森に篭って雨の日も毎日。独り森の音楽会よ。一緒に散歩してたラビットとブロイラーはまるで耳を傾けなかったわ」

「ああ、むしろうるさくて迷惑だったろうな」

「ひどいわ！　でも否定出来ないわっ！」

「ってか、家で練習すれば良かったんじゃね？」

「それはイヤ。練習してる姿なんか見せたくないし、とにかく家ではしたくないの」

「ふぅん、ま、せっかく練習したんだから、本番頑張ろうぜ？」

「ええ、お互い練習の成果を発揮しましょう」

こうして本番を迎えた音楽発表会。たった六人しか居ない生徒の演奏を聴きに、保護者や近所の住人も集まった。それを前に、絵乃の脚は緊張で震えていた。人前に立つのが苦手なのだ。

男爵、メイクイーン、ジャガバター、里芋、煮っころがし、ベニアズマ、蒟蒻…。

脳裏に芋畑を思い浮かべ、目の前の観客と照合する。ただ、どうしても芋に置き換えられない人が居た。

両親ではない。

学校に来るなんて聞いてなかった。

◇◇◇

何日もかけて練習した楽曲も、本番はたった数分、それが終わった。

家に帰った絵乃は、一人落ち込んでいた。

「どうしたんだい？　何かあったのかい？」

そんな絵乃に優しい声をかけたのが、近所に住む、トメばぁちゃんだった。

「ビブラート、上手くいかなかった」

「オブラート？　美味くなかった？　そりゃそうだべした、ありゃ苦い薬包むためのもんだ。味なんかしねぇ」

「そうじゃなくて、ビブラート、今日の演奏が上手くいかなかったの」

「そんな事ねぇ、上手だった」

「でも、結果は出せなかった。あんなに頑張って練習したのに」

ショックのあまり、火燵（こたつ）に置いた両腕に顔を埋めた。

「絵乃ちゃん、大事なのは結果じゃねぇ、そうやって頑張ったことが一番大事だべ。演奏は上手くいかねくても、この気持ちさえ忘れねければ、きっとこれからの人生は上手くいく。絵乃ちゃんは、人にとって大事なものの一つ、ちゃんと持ってる。それに、今日、笛吹いてる絵乃ちゃん、きらきら光ってた」

それは、決して両親はかけてくれない言葉。

しかし、絵乃が埋めた顔を上げることは当分なかった。

それは、今日の失敗から立ち直れないのではなく、これまでこっそりしてきた、音楽の練習が報われた涙を隠すためだった。

18，ヘビとカエルとぱんだ

山興村役場では、ダム建設計画会議が行われている。

村職員は数えるほどしかいないのに対し、県や国の職員の数はその倍を上回る。ましてや後者のほうが地位が高く、例え村職員がダム建設を反対した所で、上には絶対服従の頑固で古臭い縦社会組織は聞く耳持たない。

一方、村人たちはダム反対派が多数。村民の殆どは年配者で、少ない先を平静に過ごしたいと願い、立ち退きなど以っての外だ。

そこで年配者をはじめ、ダム反対派の大人たちは、デモ活動等を計画、実行しようとしていた。

その頃、腰越家は夫婦喧嘩の真っ最中。村育ちの絵乃の父はダム反対、他所から嫁入りの母は賛成なのだ。

一人娘の絵乃は板挟み状態で、頭を重くして堪えるしかなかった。

もっとも絵乃としては、ダム建設断固反対だ。この地方は夏は大雨が降り、冬は大雪が降るため、水不足に陥った経験がない。なのにダムを増やし、故郷を沈める必要などないことは、子供でも分かっていた。現在、村に水を供給している既設のダムだって、時々放水している状態だ。

ところがこの計画、村民の中でも賛成派は居るようだ。特に中年層や子供が居る家庭は、思いの外、高額な立ち退き料に目を眩ませる者が少なくない。

立ち退き料は、首都圏でも土地とマイホームを買って暮らせる程だ。

◇◇◇

帰りのホームルームが終わり、教室を出ようとした担任の美佐島秋子を呼び止めた。

「先生、ちょっと質問したいことがあるの」

「は～い？　何かしら？」

「単刀直入に言うけど、なぜダムの立ち退き料があんなに高いの？　あの金額、土地代込みで神奈川にあるうちの別荘より高いわ。そこまでしてダムを造る理由はあるの？」

「あら、鋭いトコ突くわね。でも、それは私にはわからないなぁ」

きっと先生は知っている。けど教えてくれないのには理由がある。

「そんなはずないでしょ？　嘘ついたって目を見ればわかる」

「じゃあ、絵乃ちゃんはそれを知ってどうするの？　理由がどうあれ、村がダムになる計画に変わりないのよ？」

「でも、有り余ってる水を、村を沈めてまで貯める必要がどこにあるっていうの？　税金を無駄遣いして、私たちの故郷を奪うなんて、絶対に許せないわ！」

絵乃は秋子に初めて感情を剥き出し、腹の奥底から沸き上がる怒り

をぶつけた。

飼育小屋の動物たちを誰よりも可愛がっていた、太陽の下で干した布団のようにふわふわした、優しい心の持ち主が今、自分に向けて、氷山のように冷たくて、突き刺すような視線を、27歳の秋子にはっきり向け、ヘビの標的となったカエルのように縛った。

◇◇◇

12年間ずっと過ごしてきた山興村。春には雪の中から陽の光を浴びて蕗の薹（ふきのとう）がひょっこり顔を出す。夏は山々が迫り来るような緑に染まり、夜は空いっぱいに星が瞬く。秋の紅葉狩りは無数の紅いトンボたちと一緒に蒼い空を眺めながら流れが遅い時間を過ごし、冬は家の屋根に積もった雪を落としつつ、火燵でくつろぐ。

そして、どんな時も仲間が居る。みんなで遊んで、学んで、辛いことがあったら助け合い、嬉しいことがあれば喜び合う。この日本が忘れかけた当たり前の日々が、ここにはある。

私は、そんな村を大人の汚い金にまみれたプロジェクトから守りたい。

その熱意を最も確実に伝えるには、役場の会議に出席していて、内情もよく知っているであろう秋子先生がベストだと思った。それが通じたのか、秋子先生は諦めたような顔で溜め息混じりに言った。

「絵乃ちゃんが村を守りたい気持ちはよく分かったわ。じゃあね、ダムを設けようとしてる理由云々を特別に教えてあげる。どっちにしろ、理由はそのうち公表されるけどね」

「早く知りたいの。杭は出る前に打っておきたいから。それに、追い出す村人に理由を知らせないなんて、おかしいわ」

学校で話すのは他の職員に聞かれるとまずいので、私は村外れにある秋子先生の家（平屋建て借家）に招かれ、一対一で話すことになった。

「ちょっと難しい話かもしれないけど、いいわね」

「ええ、問題ないわ」

築３５年のボロ家、火燵に二つの湯呑み、秋子の背後にある高さ５０センチほどの棚の上から『たれぱ〇だ』のぬいぐるみが見守る中、とても垂れ目では聞けない話は始まった。

19，ダム計画の真実

ダムを建設する理由をいつまでも公表しない自治体に対し憤りを覚えた絵乃は、何等かの事情を知っているであろう公務員で学校の担任、秋子にマジギレした。

それに耐え兼ねた秋子は絵乃を自宅に呼び、ダムを建設する理由を話す運びとなった。

「絵乃ちゃん、話す前に、まずあなたに言っておきたい事があるの」

「なに？」

「私は、あなたの味方よ」

絵乃は半信半疑でそれに頷いた。

「でね、ダムを建設しようって話だけど、この村の電力って何で発電してるか知ってる？」

「原子力発電」

「そう、でもね、この村に電力供給してる発電所は故障や不具合が多い。そこで、原発（げんぱつ＝原子力発電所）が故障した時に備え、新しく水力発電所を設置することで、原発が故障した時に電気を分配するシステムをつくる、って計画が持ち上がったの」

「ふぅん、それで、この村は山に囲まれてて、尚且つそこに水を供給するにはちょうど良い面積なのね」

「そういうことよ。それが公表する予定の概要なの」

「で、本当はどうなの？」

絵乃は思った。それだけの理由でわざわざ村を沈めるのは大袈裟ではないか。だったら原発を故障に強い構造にしたり、メンテナンス体制を強化すれば良い。

「さすが絵乃ちゃん、賢いわね。当然そんなの建前にすぎないわ。ここから先は秘密のアキコちゃんよ」

「それ、ギャグのつもり？」

秋子は、名作漫画と自分の名前を掛けた。

「ごめんね、ギャグセンス低くくて」

「ふふっ、そうね」

ここで初めて、二人が笑顔になった。

「で、本当の理由は？」

「それ言っちゃうと、私の死活問題に関わるから、他の人に向かっては言えない。例え絵乃ちゃんでも」

「そうね。でも必ず真実を突き止めるわ」

言いながら、揺るぎない真っ直ぐな視線を再び秋子に向けた。

「ここから先は独り言よ。誰に言ってる訳でもないからね」

絵乃はこっくり頷いた。

「まず一つ、この村は財政状況が良くない。村の職員は、ここで働くよりは近隣の市に移ったほうがお給料が高くなる。二つ目は、国が余った税金の使い道に困ってる。その余った予算を年内に使い切らなきゃ、次からあんまり予算が貰えなくなる。だから国は各地に道路やダムを建設して、なんとか余った税金を使い切ってるのが現状。今回、その使い切り計画に山興村が選ばれた。それが本当の理由」

当然、そんな事を公表してしまえば村人たちが激怒するのは目に見えている。秋子の独り言はトップシークレットだ。

「そう、一部の勝手な事情で、みんなの住む場所と、思い出を奪うのね。あなたたち公務員って奴は」

絵乃は明らかに秋子に失望した眼差しを向けた。

「絵乃ちゃん、さっき言った通り、私は村のみんなの味方よ。例え公務員という立場であっても」

「大人はそうやって味方になったフリをして、人を騙しながら生き残る術を探す生き物なんでしょ？」

「そういう大人も確かに居る。けど、私は違う！　公務員である前に一人の人間だもの！　お願い、信じて！　私は、この村も、この村のみんなも大好きよ！！」

訴える秋子の目は涙ぐんでいて、助けを求めるように声を絞り出し、両手を祈るように、八の字にして机に置いた。それは、絵乃に手を取って欲しいようにも見える。

「絵乃ちゃん、あなた一体何があったの？　どうして人を信じられないの？　大人の社会がそうなってるって知ってるの？」

「子供だと思ってバカにしないで」

心配そうに尋ねる秋子に、絵乃は無表情のまま答えた。

「私は、ダム計画の秘密を話した。だから今度は絵乃ちゃんが話す番よ。大人をそういう風に見るようになったいきさつを教えて。担任教師としてじゃなくて、一個人として聞くから」

「やっぱり大人は汚いわ。そうやっていつの間にか取引してる。でも、ダムの事を教えてもらったのは事実だし、私にとっては大したことじゃないから教えてあげる」

「ごめんね、プライバシー探るようなマネして」

後付けで交換条件を突き付けたせいか、少し申し訳なさそうに、絵乃に微笑んだ。

１９，ダム計画の真実（後書き）

今回、国の税金の使い方を作中に表記しましたが、この物語はフィクションであり、税金の使い道及びその他一切の事情は実在のいかなる国とも無関係です。

20，二人の決意

絵乃にまだ公表されていないダム計画の秘密を話した学級担任の秋子は、それと引き換えに、絵乃が人の内面的な汚さを知った理由を尋ねることにした。

「人の汚さを知った理由？　そんな事を訊かれても分からないわ。物心ついた頃からそういうものだと思ってたから。人のタイプは大きく二つに分かれている。それは、汚れを知ってる人と、知らない人よ。ただ、汚れを知っているからといって、その人が必ずしも汚い人間とは言えないのも事実。哲学的に問い詰めると難しいわね」

「あなた、本当に小学生？」

「いくつに見える？」

問われると、秋子は絵乃の身体をぱっと見て答えた。

「見た目は子供、頭脳は何やら、ってやつ？」

「ふふっ、そうね」

この場で二度目の笑み。

「もう少し話すとね、私、親に信用されてないみたい」

「親って、どっちの？」

「どっちも」

「じゃあ、どうしてそう思うの？」

「そんなの簡単よ。例えば、母親は神経質で、少しでも部屋が散らかってると落ち着かない性格なの。でも私は多少散らかっているくらいなら、ある程度ほったらかしにして、後でまとめて片付ける性格。だけど、その前に大概母親が片付けてしまう。

私が片付ける、って言うと、どうせ絵乃は片付けないって言って聞かないわ。その時私は、ほったらかす私にも問題はあるけど、子供を信用出来ないの？　って訊いたら、出来ないってはっきり言われた。正直ショックだったわ。

私は今まで母親を信じていたのに、向こうは信じてなかった。だから私は、親すら信じられないのなら、血縁もない他人はもっと信じられない。そうやって色眼鏡で周囲を見るようになった。それは私に直接関係ない、料理に青酸カリを混入させた中毒殺人事件や、政治家の汚職事件みたいなメディアの影響もあるわね」

「じゃあ、お父さんも信用できないのは？」

「私、お父さんの事はよく分からないの。仕事に追われて、私と接する機会があまりないから」

「そうなんだ。それじゃ引っ越すのも不安よね。知らない人ばっかりの土地で、両親も信用できないなんて。でも、何か相談したい事があったら、私に連絡してね。ここから神奈川は遠いけど、手紙や電話なら離れていても大丈夫」

絵乃は目のやり場に困りながら言った。

「ありがとう、あなた、本当は優しいのね」

「本当はっ！？　私って日頃ツンツンしてる！？」

「してないわね。ごめんなさい、私の中でレッテル貼ってたの。教師とか公務員は誰しも怪しい、みたいな」

「そうねぇ、公務員ってのは、頭固いのが多いわよね。仕事は漫然、そのくせ言う事だけはいっちょ前ってムカつく野郎がこんちくしょー」

「あなたも色々たまってるのね」

「ええ、安月給だし、あの学校（山興小学校）、日常的に酔ったまま出て来る奴も居るし、それで仕事が覚束ないこともあるのよ。ん で、私みたいな若手が意見言っても教育委員会の奴らは聞く耳持たないし。だからね、私だけでも、絵乃ちゃんたち生徒のみんなにとって、本当に信じて良い存在になりたいの。奴らの反面教師っぷりのおかげで、私はこんな目標を掲げられたわ」

小学生に日頃の鬱憤を打ち明けたアラサー女は、どろどろねっとりした毒が抜けてスッキリしたご様子。

「結局さ、日常に溢れるプラス要素をどれだけ伸ばせて、マイナス要素はどれだけプラスに変換できるかなのよね、人生って。絵乃ちゃんは早くもそれが解ってきてるんじゃない？」

「そうね、けど、どうしても割り切れない部分だってあるわ」

「それは私も一緒。だからこそ、絵乃ちゃんたちと力を合わせて汚い奴らに立ち向かおう、って思ったの」

「でも、そんな事しちゃっていいの？　ダムに反対したら、あなたの立場がどうなるか分からないわよ？」

「それは、うん、でも、やる。みんなの故郷（ふるさと）、守らなきゃね」

秋子はダム建設中止を訴える要望書を作成、署名を募るノートも用意すると絵乃に告げた。ダム建設に同意した村人も居る中で、署名活動は困難が予想される。

しかし、やるしかない。二人は決断した以上後戻りはしない。

絵乃は自分の故郷を守るために、秋子は数少ない生徒の笑顔を守るために。

21，若気の至り

朝、始業時間三十分前の八時頃、山興小学校の一つしかない全学年合同の教室。下級生五人が居る中、絵乃は突然椅子から立ち上がり、教室全体に響く声を張り上げた。

「あのね、私、言わなきゃいけない事があるの！」

「おう、どうした？」

五年生の大介が返事した。

「あのね、言いにくい話なんだけど」

「あぁ、俺たちみんな仲間だ。遠慮せず言ってくれ」

大介の温かい言葉に絵乃はジンとした。

「ありがとう、実はね」

「実は？」

「私、一ヶ月以上生理が来ないのっ！」

教室にこだまする絵乃の生理来ない報告。三年生以下三人は頭の上に『？』マーク。

四年生の明日太（アスタ）は理解したものの、生理が一ヶ月以上来ないと何か変なの？　という思考。

そんな中、五年生の大介はピンときた。

「って事は絵乃、もしかして」

「ええ、もしかして、うっ、急に吐き気が」

「おいおい、ちょっと待て、この前の授業で習った事を俺と一緒に実験したら成功しちゃったって言うのか？」

「ええ、大介が、あのドロッとした液体を注ぎ込んで掻き回したせいで！」

「いやいや、まだ俺のせいとは決まってないぜ。あの時アスタも一緒に実験したんだから！」

「えーっ！？　もしかして昼ドラみたいなドロドロした事情に巻き込まれたのかな！？」

「二人のせいじゃないわ。私が軽率だったの」

妙な会話が繰り広げられるある意味ドラマチックな雰囲気の教室、そこへ割って入るようにある男女が訪れた。

「みんな、久しぶり&はじめまして！」

「どもっ！」

卒業生の浦佐洋子（うらさようこ）と渡辺真（わたなべまこと）。洋子は中学三年生、真はその一つ上の高校一年生。

在校生たちは、なぜ卒業生が訪れたのか疑問だった。

「あら、久しぶりね、二人とも」

「絵乃ちゃん、元気してた？」

「絵乃は相変わらずおかっぱ頭の雪だるまだな」

「ええ、今も変わらず健康な雪肌精（せっきせい）よ」

「セック、すせい？」

「真、変な事言わないのっ！　せっきせいよ、雪肌に精し、精神の精って書いて雪肌精よ。化粧品でそういうのがあるの」

「え？　精子？」

「ち、違う！　違くないけど、精神よ。噛んじゃったのっ！　もう、それにどうしてセック、なんて間違え方すんの！？」

「大丈夫よ、二人ともそういう年頃よね。洋子ちゃん、恥ずかしがらなくていいわよ」

「絵乃ちゃんまでからかわないで！」

盛んなお年頃の高校生と、ませた小学生のやりたい放題トーク。高校生二人は何しに来たんだ？　そんな空気が漂う、学校を囲む森の中からカッコウの鳴き声が聞こえてくる爽やかな朝の教室。

「ショートで指通り良さそうな髪の洋子お姉さん！！」

日頃時間をかけて手入れしている髪を褒められた洋子は、気を良くして天使の笑顔で大介に振り返った。

「大介君、お上手ね。なぁにっかなぁ？」

真と絵乃にからかわれた直後の洋子にとって、それは嬉しくてたまらず、不気味なくらい満面の笑みだ。

すると大介は、床に膝を着き、洋子のスカートの中を覗き込むように土下座した。

「おっぱい揉ませて下さい！！」

空気が凍った。時間が止まったかのような沈黙と、大介に刺さる複数の冷たい視線。

スカート覗いてんのに揉ませて？　パンツ見せてじゃなくて？　という疑問と、こいつ、どうしてくれようか？　という処分の行方の検討が洋子の中で交錯する。

「オハヨー、みんなお揃いね」

気が付けば朝のＨＲが始まる八時半。担任の秋子が教壇に立った。

「オハヨー先生、早速だけど、質問がありま～す！」

秋子に質問する事で、大介は洋子の蛇の目から免れた。

「おはよう大介君、もしかして先生のスリーサイズが気になるの？」

「いや、質問する必要性を感じないから遠慮しとくよ」

「フッ、どうせ私はオバサンですよ。洋子ちゃんのおっぱい触るなり吸うなり好きにすればいい」

「ちょっと！！　それ先生が言う事！？　っていうか聞いてたのね、さっきまでのやりとり」

「私はあなたの先生じゃあ～りませ～んわ！！」

小学五年生が発端で醜い争いをする十五歳と二十七歳。

「まぁまぁ、俺は秋子先生に興味がないと言ってるんじゃない、勿論、洋子ちゃんにも興味津々だ」

「えっ、そうなの？　じゃあ、スリーサイズは興味ないけど、おっぱいは触りたいってやつ？」

「否！！　いや、おっぱいは触りたいけど、スリーサイズは今更聞く必要などないのだよ先生、だって」

だって？

教室内の目線が大介に集中する。

「だって、先生が教卓で居眠りこいてる時に絵乃と一緒にスリーサイズ測ったから。ついでに二人でおっぱいも触らせてもらった」

「ええ、桜舞い散るゴールデンウイーク明けの事ね。私も将来、最低限あのくらいにはならなきゃって思ったわ」

「そういえば絵乃、気持ち悪いのは治まったか？」

「えぇ、うちでやったコーヒーとガムシロップを用いた沈澱実験、ついハマっちゃったわね。飲み過ぎで翌朝まで響くとは思わなかったわ」

「ええっ！？　実験ってそれ！？」

三人が行った実験とは、グラスにコーヒーを一杯に注ぎ、それにガムシロップを入れて、底に溜まるタイプと溜まらないタイプがあるかを確かめる実験をした。カップ五杯、五種類のガムシロップを試した結果、スリムアップシュガーと呼ばれるもののみが沈澱せず、コーヒーの中に満遍なく散らばったという。アスタと大介はコーヒーが苦手なため、絵乃は1リットル以上になる五杯全てを飲み干した。結果、翌日まで不快感が残ってしまったのだ。

「アスタ、どうした？　俺たち他に何をしたって言うんだ？」

「ふふっ、可愛いわね、だったらアスタ君が想像するような実験もしてみる？」

「大介君、絵乃ちゃん、私、先生として、それ以前に女性として二人に話さなきゃいけない事があるみたいね。放課後残ってね」

「残念、私、用事があるの」

「お、俺も用事が」

二人とも冷や汗ダラダラで拒む。

「大丈夫、すぐ終わるから」

「いえ、一刻を争うので」

「そ、そうそう」

聞き苦しい口実に、秋子は普段とは違う一面を見せた。

「ええから来いや自分ら！！　あぁ！？」

「はい」

「うっ」

その時の秋子の表情は、一部の商店街やお祭りを陰で支える人の様だった。

「この二人は後でみっちり教育するとして、今日わざわざ二人に来てもらったのは解ってるわね？」

「いや、全く解らん」

「大介君みたいな事もあろうかと思って説明するわね。今日は一日授業を中止して、この村についてみんながどう思ってるか、遠い市街の高校に時間をかけて通ってる大介君と、これからその高校に行く洋子ちゃんにも聞きたかったの」

この村を潰してダムにする計画、それが実行に移るまでは時間はかかる。だが村人の間には既に亀裂が入り始めていた。ダム建設を承諾した人と、反対している人との関係は、子供たちの見えない所で確実に悪化している。

子供たちだってそれに気付いていない訳ではない。一見変わらないようで、以前とは違う空気を自(おの)ずから感じ取っていた。

そんな空気を感じながら育った真(まこと)と洋子は高校生になり、独立する日が迫っている。村内には進学先も就職先もない。いずれにしろ時間をかけて村と市街の往復をほぼ毎日繰り返せざるを得なくなる。

「そんなん決まってんべした？　先生。事情があって引っ越したとしたって、故郷無くなったら淋しいっしょ」

「私も真と同じ意見だよ。例え将来引っ越して離ればなれになっても、ちっちゃい時からずっと一緒のみんなと共有出来る場所だから。それに、この村の人たち、あったかいじゃん。そんな人たちが、中にはお年寄りだって居るのに、それこそ私たちよりずっと長くここで過ごして来た人たちの故郷を潰すなんて残酷過ぎるよ」

山興村は、内陸部の山に囲まれた小さな村。村人たちには村を守りたいという思いと、絆という目に見えない心と心の繋がりがある。

その日の昼休み、大介は洋子から愛情たっぷりにぶっ叩かれ、更に放課後、秋子から絵乃と共に使用休止になっている理科室に呼び出された。すっかり日が暮れてアルコールランプの僅かな炎と人体模型が温かく見守る趣(おもむき)のある雰囲気の中、ありがたい指導を受けた。

「二人が大人になった時のために教えてあげる。ああいう話はみん

なの前で堂々とするものじゃないの。こういうロマンチックな雰囲気の中で、二人だけの世界を共有するものなのよ」

アルコールランプの炎はロマンチックに見えなくもないが、背後の臓物丸出しの人体模型に見守られているのは、少々考えさせられるものがあった。

しかし二人は怒鳴られたり耳が痛くなって頭が重くなるような説教を覚悟していたので、その的外れなありがたいお話を納得したように相槌を打ちながら素直に聞いていたという。

22，クリスマス

クリスマスがやって来た。

雪がどっさり積もり道や田畑、敷地の区別がつかなくなる。木や建物だけが、雪に埋もれていてもその存在を認識出来る。

凍てつくこの地は、例年なら人々の心は温かかったが、今冬は暖房器具だけが温もりを感じさせてくれそうだ。

羽毛がたっぷり入ったもふもふしたジャンパーを着てても刺されるような寒さの中、役場の玄関前でダム建設反対のデモ活動をする村人が多数居た。

絵乃は感じていた。

互いに助け合って生活してきた村人たちの絆が消えようとしているのを見ているのは、切なくて、淋しくて、悲しい。先の見えない不安と胸のざわめきから一刻でも早く解放されたかった。

故郷がなくなるという不安は徐々に現実味を帯び、金が入り喜ぶ者が少数、悲しみに暮れる者が多数、ダム建設を止めようと闘志を漲（みなぎ）らせる者は大多数だった。

人々の絆が途切れつつある中で、何も出来ず無力感に浸る自分があった。

◇◇◇

留守番中、私は火燵(こたつ)で蜜柑(みかん)の皮を剥いていたところ、役場での集会から父が帰ってくるなり唐突に告げた。

「絵乃、村の退去期限日が決まったよクリスマスの今日から数えて約四ヶ月後の四月一日。それまでに引っ越さなきゃいけないんだ」

じんまり重たい口調で言った父の目には涙が浮かび、それが流れるのを堪えるように唇を噛み締めていた。

父は勤め先の会社で若い頃に落ち込んだ事も何度かあったが、それを乗り越えてからは順調に業績を伸ばし、昇進もして昇り調子だった。そんな時に知らされたダム建設計画は、本来なら幸せを感じられるようになってこれからもっと前進しようと思っていた矢先の話だった。

まるで幸せになる資格すら奪われたかのように。

生まれてからずっとこの村で暮らしてきた父にとって、この地が水底に沈むのはきっと私より辛い。

当の私は、とうとう決まったその日に実感が沸かず、うん、としか応えられなかった。

他人事のような感覚。まるでテレビで見る事件のニュースのように。

◇◇◇

村の雰囲気が悪かろうと今日はクリスマス。一年に一度のこの日に、せめて子供たちだけでもと思った担任の秋子先生が彼女宅（借家）でクリスマスパーティーを開いてくれることになった。

粉雪が舞う中、先生の借家まで歩いて現地集合。私の家は洋子ちゃんの通り道にあるので二人一緒に行った。道中、二人は寒さで滑舌悪く話していた。

「さっきお父さんが言ってたのだけれど、来年の四月一日までに引っ越さなきゃいけないのね」

「えっ！？　何それ初耳！」

「なんだか実感湧かないわ。それに、納得いかない。大人たちの勝手な都合で故郷を奪われるなんて」

「そうなんだ、とうとう無くなっちゃうんだね、この村」

言いながら洋子ちゃんは切なさを含んだ笑みを浮かべていた。

借家に着いて、ピンポーンと軽快な音をだすベルのマークがプリントされた呼び出しボタンを押すと、外開きの玄関の扉が１０センチくらい積もった雪を掻き分けながら重々しく開き、秋子先生が出迎えてくれた。

「いらっしゃい。寒い中来てくれてありがとうね。これで今日来れる人はみんな揃ったわね」

「さ、寒かったわ、雪の妖精のように白い私の肌が青ざめそうなくらい。で、でも、冬も湿気があるお蔭で美肌が保てるわ」

私は全身をガタガタ震わせながら、豪雪地帯のメリットを豪雪地帯の住人（秋子先生）に語った。後で冷静になると、なんて無意味で

間抜けなアピールだったと気付いた。

「こんにちは～、私、秋子さんの卒業生じゃないのにお招きありがとう！」

私以外に集まったのは卒業生の真君（まこと）と洋子ちゃん、五年生の大介君、四年生のアスタ君だった。

秋子先生のお蔭で、今年も楽しいクリスマスを過ごせそうだ。

２２，クリスマス（後書き）

平成２２年２月２２日に第２２話公開です。

未公開作品を執筆してたら更新こんなに遅くなっちゃいました。継続して読んで下さっている方、いらっしゃいましたら申し訳ございませんｍ（＿＿）ｍ

23，大介の意外な一面

クリスマスの夜、秋子先生の借家に村の子供たちが集まってパーティーが行われていた。

秋子先生がキッチンにある冷凍室からケーキの箱を取り出してきた。なぜ冷凍室なのだろう？

「みんな～、このケーキはアイスクリームで出来た特別なケーキなのよ。元気がある子もそうじゃない子もケーキで景気良くいきましょう！」

一瞬、元気がある子もそうじゃない子も時間が止まったようだった。普通ならケーキの登場を喜ぶ場面なのに。

「先生、笑えないし突っ込めないギャグはリアクションに困りま～す」

時間が再び動き出し、大介が余計な事を言うと、秋子先生はケーキを扇形に切り分けながらニッコリして、そうだねと返事した。

「あぁ、ケーキなのにひんやり冷たい、まるで雪解けの小川の如く喉から脳内が澄み渡ってゆくようだわ」

「ケーキなのにアイスクリームの食感なのが不思議で美味しい。秋子さんグッチョイス！」

私と洋子ちゃんはケーキを絶賛。しかし大介は異論を述べた。

「おいちょっと待った！　なんで俺の分だけペラペラの千切りなんだよ！？」

「ごめんね、五等分は難しいから私と大介君のだけちっちゃくなっちゃった。でも私の分のほうがちょっと多いかな。てへっ！」

「ちょっとじゃねぇ！！　秋子先生のほうが十倍くらい多いだろ！！　それにオバサンがてへっ！　なんて言っても可愛くねぇ！！」

「私、まだ二十代なのになぁ」

秋子先生はまたニッコリした。

反論した大介は、お茶目な秋子先生に隣の部屋へ連行され、戻って来る時は首を掴まれ引きずられながら両手で股間を押さえ、瀕死状態だった。

しばらくして意識を取り戻した大介は、サンタクロースが描かれた銀紙のパッケージに包まれた瓶を両手で頭上に揚げながら言った。

「おいみんな！　シャンメリー開けるぞ～」

シャンメリーとは、子供が居る家庭のクリスマスパーティーでよく飲まれる定番の炭酸飲料のことで、カルピスウォーターくらい白いプラスチック製の詮を開けるとそれがロケットのように勢いよく飛ぶ。

スポンッ！

勢いよく吹っ飛んだ詮は一旦天井にコツンと当たってから落下する。

コツンッ！

「ぁいたっ！」

そして落下し、私の頭に直撃した。言葉の割に、プラスチックの詮は痛くも痒くもなかった。

「あっ、わりぃ絵乃」

大介が謝るとみんなが、あははっと軽く笑った。

「ふふっ、来年は当たり年になりそうね」

私は詮の直撃に、来年を予感した。でも来年には、ここが無くなってるのかな。どうかダム建設が中止になって、今まで通りみんなで楽しく暮らしたいな。本当に当たり年だったらいいな。

それからしばらくして、テーブルを囲んだまま真君と洋子ちゃん、アスタ君と秋子先生、大介と私がそれぞれ二人で話していた。

「なぁ絵乃、お前はダムについてどう思ってるんだ？」

大介にしては珍しく、真面目な話を振ってきた。

「私に相談かしら？　いいわよ。お姉さんに何でも話しなさい」

「あぁ、そういえば一つ年上なんだった」

「そうよ。普段はそんなの意識しないけれど」

こうしてダムの話を真面目にするのは実は秋子先生に次ぐ二人目だった。家庭内ではその話は何故かあまり持ち上がらず、そもそも客観的にみれば腰越家は普段から会話の少ない家族なのだろう。

「俺たち小学生はみんな四月までに引っ越すだろ？」

「ええ」

「んで、うちは引っ越しと同時に親が離婚する」

「え？　離婚？」

離婚という未知に、どうリアクションしたら良いか分からない。とりあえず所々相槌を打ちながら話を聞く。

「そう、それで俺は母親に付く事になってるんだけど、正直、俺は長男として今住んでる所の後継ぎになるつもりだった。こんな俺でも村に愛着あるからな」

仮にこの村がダムにならず残ったとして、将来はこの村の誰かと結婚して、子供を産んで、なんて平和的な未来像があった。しかしこの村は存続そのものが危うい状態である事をいつの日か知った。

この山興村は『準限界集落（じゅんげんかいしゅうらく）』と呼ばれる、全人口のうち五十五歳以上の住民が半数を超え、後継者不足が懸念され、将来の存続が危うい村でもあった。ダム建設計画の背景にはそれも関係している。

そのような土地の未来は果たしてどうなるだろう？

頭の中で未来を想像しつつ大介の語る内容も理解し会話を続ける。

「あなたって男の子らしいわね。私そこまで意識していなかったわ」

「ああ、体育の時間は絵乃の着替えにさりげなく注目してるぜ」

そういう所が男の子らしいのは以前から知っていた。しかし私に欲情していた事には少し驚いた。

「あら、そうだったの？　私も男の欲望を孕んだ視線が向けられるようになったのね。なら私は次回から大介の着替えに注目させていただくわ」

「いや、そこは恥ずかしがったり今度から更衣室で着替えるとか言うトコだろ」

「だって、やられっぱなしではいられないもの」

物心ついた頃から思っていた事だけれど、私の思考回路は常軌を逸しているみたい。

私だって十二歳。男子と同じ場所で着替えるのに抵抗はある。しかし洋子ちゃんが六年生の頃も同じ教室で着替えていたし、私は恥ずかしいから別の部屋にして欲しいと洋子先生に告げるのも、胸がつかえてしゃっくりが出そうなくらい抵抗があった。

「で、本題のほうはいいの？」

話が脱線したので本題に戻そうとしたら大介は、やっぱ明日話す、今日はクリスマスパーティーを愉しもうぜ、と言った。それもそうねと私は同意し、パーティーを愉しむことにした。

今まで無邪気な腕白少年かと思っていた大介だけど、自分なりに物事を捉えて考えているんだなと感心した。

どこか思考がズレている私でも、頼りにしてくれている以上は彼の心情を真摯に受け止め、気持ちを良いベクトルへ向けられるよう応えていきたいと思った。

２４，欲望パーティー

大介がシャンメリーのキャップをロケットのように発射させて、天井に当たって落下したそれが絵乃に当たるちょっとしたハプニングが起きた後、皆それぞれに盛り上がっている。

その時、俺、渡辺真（わたなべ まこと）は幼なじみで一つ年下の浦佐洋子（うらさ ようこ）と二人で喋っていたのだが、少々上の空だった。

「ねぇ真、どうしたの？　なんかぼーっとしてない？」

「ん？　いや大丈夫。まぁほらさ、最近色々あるだろ？　村がなくなるとかなんとか」

「うん、私も育った村がなくなるのは悲しい」

村がダムになってしまうのは俺にとって非常に悔しい話。不真面目な俺でも日頃から真剣に頭を悩ませていた。洋子が言うように、俺も悲しい。

しかし、目の前にもう一つ課題が出来てしまった。

「あぁ、俺、病気かな」

「え、大丈夫？　熱でもあるの？」

言って洋子は右手の平を俺の額に当てた。

「う～ん、熱はないみたい」

「あぁ、熱っぽくはないんだけど」

別の意味で熱だなんて洋子には言えなかった。

六人で木製で濃い茶色の四角いテーブルを囲み、俺の右隣に洋子、左斜めには手前に小学四年生のアスタと、奥に小学校教諭でこの借家の住人であるショートヘアで美人だけど婚期を逃しそうな秋子さん（俺の在学中にも先生だったら良かったのに）、右斜めには手前に五年生で相変わらずの大介、奥にちょっと前までおかっぱだったのに少し髪を伸ばし始めたと見られる六年生の絵乃。

やばい、絵乃やばい。

ちょっと賢いおかっぱのマセガキだと思ってたのに何だこれ？　髪伸びただけで反則的に可愛い、ってか美人じゃねぇか…。いやでも絵乃は小学生だべ。俺は高校生だぞ？　こりゃまずいべした。いやでもストライクだわ。

そこで脳裏にある言葉が浮かんだ。

ロ、リ、コ、ン！

あぁぁぁぁぁっ！！

やべぇ！！　大人なら四歳の差なんか問題ねぇけど高校生が六年生とはいえ小学生にそれはやばい！！

いや違う、俺は決してロリコンなんかじゃない！　これはたまたまだ。そういう事だってあるんだ！

そうだ、冷静になれ俺。

あぁ、人生って何が起きるか分かんねぇなぁ。この俺が小学生に惚れるなんて、神でさえ予想し得なかっただろう。

それにしても大介の野郎、年が近いからって羨ましい。絵乃と楽しそうに何話してやがるんだ？

◇◇◇

大介と絵乃はこんな話をしていた。

「ねぇ大介、私に何か付いてる？」

「いいや、俺には玉が二つ付いてるけど絵乃には見当たらないなぁ」

「そう、ならいいわ。そういえば、牛の玉は焼肉にしても良いらしいのだけれど、人間のはどうなのかしらね？」

「おいおいまさか俺の玉で実験するつもりか？」

「あら、して欲しいの？」

「や、やめてくれ、それだけは、ひゃ、やめて下さい！」

その時の絵乃は、悪女の笑みを浮かべ、今にも大介に襲い掛かりそうだったという。

「あぁ、父ちゃん母ちゃんご先祖さま、どうかお許し下さい、湯沢家の血筋は僕で終わってしまうかもしれません…」

以上のように、真には聞こえていなくて良かったであろう会話だった。

◇◇◇

この村にクリスマスが訪れるのは、これが最後になるだろう。パーティーに集まった皆はそれを理解していただろうが、誰もそれを口にしなかった。

25，最後のお正月

元旦、山興村は例年並みに車が埋まるくらい雪がどっさり積もっていた。

お正月は近所に住むトメばぁちゃんと一緒に過ごすのが腰越家の恒例となっていたけれど、三月の終わり頃に引っ越す事になってしまい、これが一緒に過ごす最後のお正月になりそうだ。

三が日は村役場の玄関前で毎日行われるダム建設反対を訴える村民のデモ活動もお休み。村は束の間の静けさを取り戻していた。

私は例年通り、こたつに入って駅伝大会の中継を観ていた。今度引っ越す所は、この駅伝大会のコースに近い場所だ。来年の今頃は、生でこれを観ているのかも知れない。

今、私が居るこの村は、雪がどっさり積もっているというのに、駅伝のコースはそんな様子など微塵もなく、蒼く晴れ渡っていた。

そんな遠い所に引っ越しちゃうんだなぁ…。

そう思うと、やっぱり淋しい。

そんな事を考えながら黄昏れていると、キッチンからトメばぁちゃんが、お雑煮をお椀に入れて持って来てくれた。

だし汁の中で混ざり合う大根、人参、ほうれん草、そして角切り餅。我が家のお正月の定番。

うん、美味しい。

「トメばぁちゃんはこれからどうするの？」

「はて、どうするべした。オラは何だかこう、追い出されちまうってのが、実感出来ねぇ」

私にだって追い出される実感がないのに、ずっとここで暮らしてきたトメばぁちゃんは余計にそうだろう。

しかし三が日が過ぎれば、いよいよそうも言っていられなくなるだろう。引っ越しの準備や、反対運動が本格化するのは間違いない。

これを境に、平和な生活とは暫くお別れとなりそうだ。

26，ヒミツノハナシ

お正月の三が日はのんびりしていた山興村の人々も、それが過ぎるとついに動き出した。子供たちは、暴動に巻き込まれると危険なので学校以外へ子供のみでの外出は避けるように言われている。

雪がどっさり積もっていて、あまり外出する気にはならないけれど、それでもたまには外に出たい。

そして私には、やる事がある。

それは、この村を守ること。例え私は引っ越しても、そこに残る人々のために、私にとっても、ふと帰って来れば、安心できる、そんなこの村を守るために、全力を尽くさなければならない。

弱冠１２歳の私にも、何か出来るはず。そう思って、これまで担任の秋子先生の力を借りて署名活動や、村長や国への抗議文を送ってきた。

しかしそれだけで計画が中止になるほど甘くない事だって解っている。

正直、どうしたら良いか分からなくて、自分の無力さに絶望している。

村を守る活動以外にも、飼育委員の仕事や引っ越しの準備として新居の家具や照明を揃えるために街へ出たり、やる事がいっぱいだ。

ある日、雪が止み、空が真っ青に澄み渡る日があった。

そんな折、私は大介を一年生の頃からずっと自分だけの空間だった秘密基地へ呼び出した。ここには、私の半生の記憶や思い出がギュッと詰まっている。

雪に埋もれて何がどうあるのか見えない秘密基地を、それでも大介は目を丸くして驚いてくれた。

「お前、ずっと一人で秘密基地やってたのか。すげぇな」

「でしょう？　雪に埋もれて座る所すら無くて悪いけど、二人きりで話したかったから、ここへあなたを呼んだの」

言うと、大介は一度唾を飲み、何故か緊張したように身構えた。

◇◇◇

絵乃が一年生の時からずっと一人で守ってきたという秘密基地に呼び出された俺。

まさか愛の告白か！？

ついこの前までおかっぱ頭で、絵乃に対し女子としての魅力を感じていなかった俺だが、近頃はロングヘアになり、かなり可愛いと思うようになった。

学年は絵乃が一つ上というだけで年齢差もほぼないようなもの。恋人になるのだってごく自然だ。

「どうしたらいいか、わからないの」

「ん？」

俺への恋愛感情を抑えられなくてどうすればいいかわからないって？

「私、この村を守りたいの。けど、このままじゃ…」

はっ…

不謹慎ながら、初めてみた絵乃の少し涙を浮かべた辛辣そうな表情にハートを刺された。寒さ以外の理由でほっぺが赤くなっているのが自分でもわかる。

それと同時に、今度は俺がどうすればいいかわからなくなってしまった。

クールでプライドの高い絵乃は、ダム建設計画が公表されてから、どうすればいいかずっと一人で考え込んでいたのか？

それで、ようやく俺に打ち明けてくれたのか？

「秋子先生にも相談したのだけれど、やっぱりわからないの」

あ、他の人にも相談してたんだ。

とはいえ困った。俺が相談される？　不器用だし頭悪いのに？　いや、頭で言えばそれこそ秋子先生とか、大人に相談すればいい。あの人だって馬鹿じゃない。

きっと絵乃は、何か違う視点から考えたいから俺に相談してきたん

だ。そうだとしたら、応えてやりたい。

しかしその場で答えは出せないので、返事は後日することにした。

27，震える声

絵乃の秘密基地で俺が相談を受けてから何日か過ぎた。

村を守るためにやる事というと、ダム賛成派の連中に学校の飼育小屋に居るウサギの糞を顔面にぶちまけるとか、グラサンとマスクで変装して爆竹とか金属バットで襲撃するみたいな過激な行動しか思い浮かばない。

まぁ、大人達は嫌がらせに家畜の牛糞を連中のアジトである仮設テントに投げたとか、ガラスを割ったとか聞いたがそれは犯罪だろ。

うん、無理だな。そもそも一人で考えるからだめなんだ。とりあえず絵乃の家に行って一緒に考えよう。

「いぃぃ、いらっしゃいぃぃ…」

身体も声もガクガク震わせながら俺を迎えてくれた絵乃。豪雪の冬、古い民家ではこたつから出ると突き刺すような寒さに襲われる。毎年のことで慣れてはいるが、やっぱりキツイ。

「いぃぃ、いらっしゃいました…」

「さささ、寒いから、ま、わ、私の真似してないで、とっ、とりあぇず上がって…」

「おぉぉ、お邪魔します…」

絵乃、さっき雪がどっさり積もった秘密基地では震えてなかったよ

な。

「おやおやこんにちは、大介君かい」

「こんちはっす！　トメばぁちゃん久しぶりっ！」

「元気にやっておるかい？」

「元気ゲンキ超元気！！！」

大介が来てまだ数分、再びカラカラカラカラ、と横開きの玄関の扉が開く音がした。

絵乃が玄関へと向かう。

俺はそれを障子戸を5センチくらいそっと開けて様子を窺う。

見ると、黒いスーツに真っ赤なネクタイ、そして司会者のタモリさんのようなサングラスを掛けた、がっしりとガタイの良い男が立っていた。

山奥にある豪雪の村でこの格好はかなり不自然だ。

リアル雪男？

悪徳セールス？

借金取り？

いや、まさか、ダム建設のために雇われた地上げ屋か！？

28，お互いに守りたいものがある

腰越家に突如現れた気迫と黒いオーラが漂う大男。地上げ屋か、それともクール&ビューティーな私をさらいにきた変態ロリコン野郎か！？　今日もまた絵乃は乙女のピンチ！？

「おやおやお帰り。わざわざご苦労だねぇ」

お帰り！？　どういうこと？　トメばぁちゃんの応対はまるで帰ってきた子供を迎えるように温かい。

「おう、村の一大事だからな」

「おいおいトメばぁちゃん、この人一体何者なんだ！？」

「私をさらいに来たの！？」

さっきから頭を駆け巡る予想を何故か信じたくない私。まさか本当に？

「あぁ、私のせがれだよ」

「「せがれ！？」」

私と大介は同時に声を上げた。信じたくなかった、何故か信じたくなかった。本当に息子さんだったとは…。トメばぁちゃんの雰囲気とあまりにも掛け離れ過ぎだわ。

「おぅ、巌（いわお）ってもんだ。突然押しかけちまって済まねぇなぁ。お袋

が実家を留守にしてたら腰越さんちに来るようにって聞いてたもんだからよぉ」

「済まないねぇ、勝手に呼んでしまって」

「いえいえ、とんでもございません。しかし、この小柄なトメばぁちゃんからこんな大男が生まれるというの！？　妊娠中にお腹破裂しちゃうじゃない」

「いやいや生まれる前からこの大きさって訳じゃないだろ」

「えっ、そうなの！？」

「そうだよ！！　時間と共に人は変わるんだよ、身体も心も！！」

これはちょっとした私と大介の漫才だった。今度は時代と共に人は変わると言う大介に私が突っ込んでみよう。

「そうね、大介は例外かもしれないけれど」

「なにおっ！？　俺だって大きくなってるんだよ、身体も心も」

「そうね、一部を除いては」

「一部？」

そう、それは普段、他の人が目にしない隠れた個性。

「…ビッグボディー・ペニスモール」

途端、ペニスモールは不明としてもビッグボディーというよりはミドルボディーな大介の顔が、沸騰したかのように真っ赤になった。

「おおおおお、女の子がそんな事言っちゃいけないんだぞ！！」

「あら図星？」

「図星じゃねぇ…」

大介って、わかりやすい。いい奴なのよね。

「まぁいいわ、大介のアレの大きさがどうであろうと私には関係ないもの」

「なっ！？」

下ネタで盛り上がっていたら話が脱線してしまった。そろそろ本題に戻りましょう。

「それより巌さん、何か目的があって帰省されたのですか？」

「おぅ、ちょっと野暮用でな」

「巌は街を陰から支える事務所の所長をしているのだけんど、今回はこの村を助けるために帰ってきたんだべさ」

「すげぇ！！　スーパーマンじゃん！！　でさぁ、街を陰から支えるって、どういう仕事なんだ？」

「大介、巌さんがどんな仕事だって良いじゃない。でも敢えて言うなら、頭領（とうりょう）さんみたいな感じかしらね。とても偉い人で、大事な仕事をしているようだわ」

「棟梁（とうりょう）？　ああ、確かに街を陰から支える大事な仕事だよな！　家が建てば街が賑やかになるし」

「そうね、確かに棟梁さんは街を陰から支えているわね」

巌さんの職業がどういったものかは、大介はまだ知らなくても良いだろう。

しばらくお茶をした後、トメばぁちゃんと巌さんは帰っていった。

◇◇◇

村の子供たちの引っ越しまで二ヶ月と少し。刻一刻と別れの時は近付いている。そこでという訳でもないが、なんだか寂しくなってきた絵乃は、小学校の全生徒と、中学三年生の洋子、高校一年生の真（まこと）を家に呼んだ。

「いや～、絵乃ん家（ち）なんて久しぶりだべした。おっ、大介、元気にしてたか？」

「おう！　元気だぜ！　洋子のおっぱいでも揉みたい気分だぜ！」

「よっしゃ！　行けー！　俺は絵乃でもナンパするか！」

「きゃーっ！！」

まりもっこりのように目をニンマリさせた大介がえいっ！！　と勢い良く洋子にダイブ！！　欲望のままにBかCカップの胸を鷲掴み！！

ぐおおおおん！！

刹那、まるで鐘の音のよう、大介の二つの玉は洋子の膝による衝撃を受けた。

「ぐおおおおっ！！」

その場で悶(もだ)え膝を畳みモジモジしながら左右に転がる大介。うぅ、あぁ、と、か細く喘いで薄れゆく意識を保とうと奮闘しているのだ。

「あぁ、うぅ、くはぁ、あぅ…」

そのままガクン、と大介は眠りに墜ちた。

一方、高校生の真は小学生の絵乃をナンパ。危険だ。

「なぁ絵乃、子供の作り方知ってるか？　俺が教えてやろうか？」

「あら、小学生の私にそんな事を教えようとしてくれるのはこの変態ゾウさんかしら？」

絵乃は不敵な笑みを浮かべ、胡座(あぐら)をかいている真を優しく押し倒し、股間を踏み付けてそのまま円周状に足を回す。

「あっ、あうぅっ！」

小学生に攻撃されて天国に居るような気分を味わう危ない高校生、もとい真。

「ほんっと、真と大介ってそっくりで仲良しよね！」

その口調は何処か嫌味のようにも取れる強いものだった。

「「おう！　心の友よ！」」

二人は立ち上がって肩を組み、キリッ！　と答えた。

「洋子ちゃん、男の友情に憧れてるのね」

「絵乃ちゃん、私たちは女の友情で対抗よ！」

「ええ、頑張りましょう」

一方、一年生から四年生の四人は、四年生の明日太（アスタ）を筆頭に別のコミュニティーが構築されている。明日太が話を切り出す。

「さて、この村は新しく出来る予定の水力発電所に水を供給するためのダムを造るということで滅亡の危機に立たされているのですが、そもそも何故、水力発電所が必要なのかという議題で話を進めて行きたいと思います」

「はい！」

黒くて縁(ふち)の細い眼鏡を掛けたお坊ちゃん頭の三年生、渋川宇宙(しぶかわそら)がハキッと挙手。

「宇宙君、どうぞ」

明日太が決して指を差すことなく宇宙に右手を差し延べた。

「僕のデータによりますとですね～、山興村の近辺は水源が豊富なため、ダム建設に適しているということですが～、そもそも水力発電所が必要とされている理由の一つに、国の予算を調整するためという事と、原子力発電所が故障した際の電力不足を回避する目的があるということなんですね～」

「なんでダムを建てようとしてる人たちは、原子力発電所が故障するかもって思ったのかな？」

二年生の高崎(たかさき)すみれが疑問を投げ掛けた。

このように、高学年や中高生の四人がじゃれ合っている最中(さなか)、中、低学年の四人は真摯(しんし)にディベートを繰り広げているのだ。

◇◇◇

子供たち八人は絵乃の家を出て、村役場付近の雑木林から大人たちのダム建設反対運動を覗き見ようとしていた。

「あら、今日は役場の中に乗り込んでるのかしら？」

「きっと中で大乱闘だぜ？」

いつもなら役場の玄関前で大声を上げてデモ活動をしているダム建設反対派の大人たち。しかし今日はその姿がない。なので絵乃と大介は役場の中でデモ活動をしていると推測した。

「君たち、何をしてるんだい？」

「何をしてるって、そりゃあデモを覗いてるに決まってるじゃんか」

「そうかい」

「って、あれ？」

俺と会話しているのは誰？　大介は硬直しそうな身体を無理矢理回れ右して振り返った。

「えっ！？」

大介は驚愕の声を上げた。

七人の子供たちも声は上げなかったものの続いて驚愕。緊張が走った瞬間だ。

背後に居たのはダム建設を推進する機関の作業着を着た、白髪で七三分け、大きな四角い眼鏡を掛けた中肉の中年男性が子供たちの背後にから声を掛けてきたからだ。

やばい、ピンチだ。低学年の三人は身の危険とガクガクブルブルしそうなくらいの焦りを覚えた。しかし男性は意外にも含みのない柔

和な表情だ。

「みんなは、この村がダムになるのはイヤかい？」

「イヤに決まってるだろ！！」

「えぇ、好ましくないわ」

他の子供たちも怯えながら揃って頷いた。

「そうか、そうだよね、おじさんも気持ちは良くわかる。でも国を守るためには仕方がないんだ。みんなは、そもそもなんでここにダムを造ろうとしているかは知っているかい？」

「ええ、原子力発電所が故障した時の予防策として新設する水力発電所に水を供給するためでしょ？」

「うん、その通りだ」

男性は複雑な心境なのか、表情を曇らせ、重たい口調で肯定した。機関の人に肯定されてしまい、子供たちの心中では村がダムになる計画の現実味が更に強くなった。

「おじさん、村、ダムにしないで」

不意に男性のズボンをくいっとつまんで涙目で言ったのは、最年少、一年生の倉賀野希（くらがの のぞみ）。希の澄んだ眼差しに、男性は途端、目を潤ませた。

「ごめんよ、ごめんよぉ、こんな事になってしまって、本当にごめ

んよぉ…」

そのまま泣き崩れ、近くに立っている木に右手を着く。

「おじさん、良かったら教えてくれませんか？　その涙の理由を」

言って絵乃は男性のぶら下がる左手を両手で握り、上目遣いで見つめた。

２８，お互いに守りたいものがある（後書き）

約半年ぶりの更新です。この物語は震災発生前に構成したフィクションですので、あくまでも仮説として受け入れていただければと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6339e/

あいはぐ

2011年11月15日20時21分発行